投函

特100
12

活ける怪談 死靈 生靈

寺澤鎭著

若松書院發兌

大正
9. 8. 21
内交

序文にかへて

寺澤さん、暫らくお目にかゝりませんね。私は先頃關西に旅をして、半月ばかり大阪船場の宿に居ましたが、あなたが神戸に居られることをつひ忘れてゐました。あなたはどうしても東京の人のやうな氣がしてゐます。箱根から東に化けものはゐないといふことですから、私はあなたが化けもの退治に關西へ行かれたのであらうと思つてゐます。あなたが神戸でいけどられた化けものが、一冊の本になつて出るさうで、嘸かし恐ろしい化けものたらうと思ひます。其の本に序文を書けといふあなたのお手紙で、私は正體を見ない化けものゝ口上を言はされるやうな氣がして、私から先づ慄へ上りました。

私はさして東京が好きといふわけでもありませんが、しかし京都や大阪や神戸よりは矢張り東京がよいと思ひます。大阪へ着いて先づ情けなく思ふのは、あの停車場前の軒の低い家の赤提灯に、御支度所と書いたのが、ふら〳〵と風に揺いでゐることです。あの赤提灯の中から、十九世紀の化けものが、梅幸の幽霊のやうに飛び出しさうな氣がします。『田舍だなア』といふ無持ちが先づ停車場前の廣場で起ると、それから先き何を見ても何を喰べても、赤提灯の第一印象が附き纏つて、一つも感心するものがなくなります。私のやうに二十歳ぐらゐまでを大阪と其の附近とで暮らしたものでさへさうなんですから、生粹の東京ッ兒に關西生活の出來ないのは尤もなことです。矢張り化けものゝゐない箱根から東がいゝのでせう。化けものゝゐないところに住んで、化けものゝ本を讀

んでゐるのが一番いゝのでせう。

こんなことが序文にならば幸ひです。

一九二〇年七月八日

東京、下目黒に於て

上司小劍

著者曰す

自分に不利益を齎らさない限り『變化を』好むのは人情であります。『變化』の無い處には進歩も發見も悦樂も興趣も求め得られぬからであります。

『變化』を好む人情は『奇拔』を希ふ心となり、『奇拔』を希ふ心は聽て『怪談』などに趣味を有つことゝなるのであります。

私は昨年の夏、五十日間ばかり齒を疾みました。そして其の間氣分の良い時は或行者の許へ遊びに行くのを常としてゐました。行者の宅では色々な怪異を目擊しました。行者や行者を訪れる人々から色々な怪談も聽きました。私は其れらを何んなに面白く聽いたり見たりしたか知れま

せん。

其の中の最もロマンチックなものと、私が夫れ以前に嘗て見たり聽いたりして置いたものとを合せ十話集めたのが此の書物であります『活ける怪談』と銘打つたのは、此の十話は、怪談の當事者が全部若しくは一部必ず現在生存してゐる話ばかりだからであります。

『死靈』や『生靈』が果して實在するものか何うか、そんな事は何方でも宜しい、『奇拔』を希ふ通有性の所持者たる私共は怪談の『怪』その事だけに充分の滿足を覺え得るからであります。心理的考察の何うのと

インタルロゲーションマーク
『？』だらけの理屈を立ち入つて食つ付けるのは怪談の可惜艶を消し去るものではありますまいか。

私は此の本が涼み臺や爐邊の物語の材料にさへなつたら、素より其れで光榮でもあり欣びでもあるのです。只だ左の三項だけは茲にお告げして置き度いと思ひます。

一、當事者の迷惑を思ひ行者の外は成る可く氏名なり住所なりを變へて置きました。

二、行者の意見やら素性やらを書かうかとも思ひましたが、私が行者の廣告でもするやうに誤解されても困りますので見合せました。

三、物語の中には迷信もあり醫術を無視した箇所もありますが、其れは興味中心に書いた結果であることを御承知置き願ひます。

大正九年初夏

陽風生記

目次

稅務屬の幽靈

天下一品の奇病……（强度の神經衰弱と云ふ高橋佐藤の兩博士も匙を投げた）……一

罪惡の應報なり……（鯉江さんと渡利の會話罪惡があらう否無い失敬な）……五

君は妾が有らう……（十善の說明に悔悟す不思議や恐怖の震ひ止る）……九

稅務署屬の相島……（肺を病める夫に辛く當る美くしい妻の花枝）……一三

昨夜から耳鳴が……（渡利が無意識に足を踏んだあらと見上げた花枝の眼には魅力が滿ちてゐた）……一七

相島富三の幽靈……（五月雨降る或よ夜の事渡利は紅葉橋の袂で震へ出した）……二七

心を清く持直す……妾を廢め相島を吊ふた渡利は遂に二十五日で全快した……二九

女將の身投げ

馬鹿の五段返し……材木商の北尾は艶次に打ち込んで今までの信用を失なつた……三二

艶次落籍さる……五段返しの記事で艶次の人氣は落ちた德兵衛は切れると力みだした……三六

妾の入水……本妻は人型を作つてのぶを呪つた妾は遂に氣が狂た……四〇

疑問の猿股

町長辭職の理由……さとは世にも珍らしい嫉妬深い女で夫の顏には常に生傷が絶えなかつた……四七

おや猿股の綻ひ……榮町の電車乘換でさとは狂人の如く暴れ狂つた……五一

女は重態に陷つた……三毒煩惱を說かれてさとは釋然として解脫した……五五

君奴

狐憑か蛇憑か……夫の出征した留守にお靜は發狂しれそして行者の荒療治を受けた……五八

ホヽ敷島は忌や……爪の炎の暑さに逃げだしたおしづは鯉江行者の宅へ駈け込んだ……六一

あら何うしたの……おしづの狂亂は行者の娘へ移つたそれで女の死靈の祟りと判つた……六五

あゝ情けない姿……おしづの夫岡本は凱旋した『違ふ〳〵私は朝日が好き』……六九

モウ癒るまいね……岡本は俄に冷酷になつて遂におしづを捨てた……七三

死靈の主は之だ……岡本は大連で病妻を捨てた今では機成金おしづはモト藝妓……七六

彈く常盤津……二十一日目におしづは全快して富澤町から君奴と名乘つて出た……八〇

お繁〳〵

月光を浴びつゝ……おしげ〳〵と叫び歩いてゐた狂人が東陽町で首を縊つた……八五

覺えがあります……水一杯も咽を通らぬ病氣彼女は縊死狂人の女房であつた……八七

亭主が子守役……十八の年に駈落ちして來たお繁の稼き高は亭主よりも多かつた……八九

おしげの愚痴……氣晴しに萬歲芝居を見に行くと其處に池田さんが居つた……九一

萬歲芝居の歸り……池田さんは意味あり氣におしげも『濟まんなも』と笑つた……九四

亭主を置き去りに……安七は其の夜から氣が狂つて『おしげ〳〵』と喚き廻つた……九八

おしげの懺悔……誠心こめた一週間の供養で難病は遂に平癒した……一〇一

綿屋の娘

綿屋の娘お光……商賣上手で美男の鐵次郎は二十四にして始めて戀を知つた……一〇五

鐵次郎の放蕩……二人は東京へ落ち延び鐵次郎は米相場で失敗を招いだ……一〇九

私は捨てられた……鐵次郎からは幾月經つても便りがなかつたお光の理知は漸く目覺て來た……一一四

敗慘の我が姿よ……無一文のお光は名古屋から岐阜まで歩くより外は無かつた……一一七

憐なる蜻蛉の姿……目覺めたるお光の理知は彼の女に斯う囁いた……一二一

忠七の位牌

あれッ幽霊が……幼い秋ちやんは炬燵から飛び出した……一三五
位牌を背負せて……おくまは孤獨と恨めしさとに泣いた忠八の孫の不具は邪慳の報ひ……一三八
迷へる忠七の魂……兩家の供養で秋ちやんは癒つた太七に佛心が起きてから彼の家は榮えた……一四一

遺言と女教師

俄に起る腹痛……邪慳な女に叱られて繼子の政子は『御免よ〳〵』と泣いた……一四四
今から四年前……無甲で數へる四本の指艮人の先の連れ合ひでしやう……一四八
先妻の遺言……鈴枝の肺病は重つた房江と君子鈴枝は金司の手を握つて泣いた……一五二
良心は目覺めた……容貌を條件とする結婚の危險な事を金司は悔いた……一五七

常狸

親子五人の狸憑……女房から始まつて家内中の間をつき廻る古狸……一六三
オイ常次郎出ろ……警察は營業停止を命じやうとした狸つきの奇妙なる擧動……一六六
行者と狸との問答……俺は人に頼れて此家の亭主を殺しに來た……一六九
世に憑き者無し……心の持ち樣で自からつけるのだ子供に怪談は大の禁物……一七四

愛兒の腫物

顔大の腫物……之は姦夫の子だお神さんの顔はサツト耳まで赧んだ……一七

小遣借りた弱味……（鎭守の森の賑ふ日曜居はお秋の手を握った）……一八一
お秋は懺悔した……（子供の腫物は自然に破れ僅に四日で平癒した）……一八五

（附録）

病床日誌　冗感冗記

大掃除……一八九
禁酒……一九〇
賢愚……一九〇
健康と禮節……一九一
安心……一九二
義齒……一九三

母……一九四
死相……一九五
迷信……一九六
靈子術……一九七
床屋……一九八
功罪……二〇〇
神經……二〇〇
作平の娘……二〇〇
成金……二〇〇
痔……二〇二
庭師……二〇三

上品な人……二〇五
八卦……二〇六
急病……二〇八
其聲悲し……二〇九
貯金……二一〇
禿……二一二
高き喜び……二一三
神戸の女……二一四
子供と大人……二一五
妥協……二一六
手術……二一七

看護婦……二一九
嫁……二二〇
病院……二二一
鏡無き國の女……二二二
藥……二二三
食慾の要件……二二四
醫師の居らぬ島……二二六
賢明な博士……二二七
不治……二二八
酒と能力……二二九
獸醫を呼べ……二三〇

變つた家憲……二三一
愛の力……二三二
時代の推移……二三三
H君を吊ふ……二三三
團體宿の話……二三四

目次終

税務屬の幽靈

◈天下一品の奇病

――強度の神經衰弱と云ふ。高橋佐藤の兩博士も匙を投げた――

大正元年十一月の或日の事であつた。名古屋市中區南桑名町三丁目の渡利醫院へ一人の顎髯のある洋服の男が入つて行つた。主人義雄に面會を申込んだ其の男は、玄關の餘りにヒツソリとして一人の患者さへも見當らないのに不審を懷き『まだ往診の時間でもなし、此の前來た時は大分流行つてゐたのに何うしたのか知ら』などゝ獨語を洩しながら取次の看護婦の返辭を今か〳〵と待つてゐた。すると其處へ大島の袷にだら

しなく茶色の兵兒帶をぐる〳〵と卷き付けた男が現はれた、云ふまでもなく主人義雄である。

『ヤア先生ですか』

『ヤア先生お久しう』

兩方同じやうに『先生』と呼ぶ。處が何うしたことか、主人義雄は妙にきよと〳〵とした素振りで、手の先などわな〳〵と震えてゐる。

『變だわい、渡利の樣子は』と思ひながら靴を脱いで導かるゝが儘に奥の座敷へ通つた。男は高井秀世と云つて渡利の小學校時代の校長であつた。今は東京に住んでゐて今度明治天皇御遺蹟の豫約出版を企てたので昔の門下生たる渡利にも購讀を賴まうとして來たのであつた。兩方互に先生と呼び合つたのも之が爲である。話を追々進めてみたが、渡利の樣

子が頗る奇妙である、視線が初中終四方へ散つて、何者にか脅えてゐるやうにきよと〳〵する、言葉も吃つたり震えたりしてゐる、殊に風呂敷包でも廣げるとハツと身を後へ引いてブル〳〵と震へ上ると云ふ有樣、高井もソウなると今度はお可笑いのを通り越して氣味が惡くなつた。で『先生は何處かお工合が惡いんですか』と思ひ切つて聞いてみた。すると渡利は斯う云ふ事を語つた。

實は今年の五月から神經衰弱に掛つた、さうして其れが追々と嵩うずるに從つて何んにでも矢鱈に脅へるやうになつた、手が震え足が震えジツとしてゐられないやうな心地になり、近頃は診察も一切廢めて治療を專ら念としてゐる、縣立愛知病院内科部長の高橋博士、好生館の佐藤博士と北川學士、武平町の鈴野醫學士などにも診て貰つたが癒らない、そ

こで心靈的方面の治療を受けてみては何うかと勸めて呉れる人があるので、御嶽教、天理教、法華の坊さん、狐憑落し、蛇憑落し、心靈術の竹内かね子、モウ有りと凡ゆるものに掛つてみたが少しも効果が無い、だから此の後何んなになる事かと心配してゐる、博士達の診察は何れも神經衰弱と云ふのである。

『それはお困りですねエ』と云ふより外に高井には宜い考へも浮ぶ筈が無かつた。その話を聞いてから渡利の顔を見ると、今更ながら其の痩せ「ほゝゝゝ」とうけて青白くなつてゐる顔や手や、深く凹んだ瞼の下から險しい神經質の光を投げてゐる彼の眼が、如何にも傷ましく思はれた。其の殺那彼の頭にフト「東陽町の鯉江さん」と云ふものが浮んだ、鯉江と云ふのは同市中區東陽町に衛養學會と云ふものを經營してゐる心靈學者で、高井

は自分の娘の病氣を其處で癒して貰つた關係から鯉江方と心安くしてゐるのであつた。そこで高井は、渡利に「東陽町の鯉江さん」なるものを説明し、兎に角一度來て貰つてはと勸めた。

◆罪惡の應報なり

――鯉江さんと渡利の會話。

『罪惡があらう』『否無い失敬な』――

十二月一日、空つ風が吹いて空には雪雲が飛ぶやうに去來してゐる日であつた。夕暮少し前頃に渡利醫院の玄關へ「衛養學會　長　鯉江敎正」と云ふ名刺を持つた黑木綿五つ紋付にセルの袴、それに朴歯の高下駄こ云ふ裝束の五十格好の男が訪ねて來た。之は云ふまでもなく高井の依頼

に依つて來た。高井の所謂「東陽町の鯉江さん」なのである。例の奥の座敷で主人と鯉江さんとは顔合はせをした。處が何うしたものか渡利は平常よりも一層ビク〳〵と恐れ、其の言ふ事も一層しどろもどろであつた。二三語會話した後、鯉江さんは嚴肅な口調で斯う言つた。

『や、判りました、貴下の病氣は罪惡の應報として來たものです、自ら縛めた繩は自ら解かざる可からず、貴下は罪惡を自覺し、其れを懺悔することが必要です、犯した罪惡があるでしやう、其れを言つて御覽なさい、懺悔しなければ癒りません』

手嚴しい此の宣告を聞くと、今まで青白い顔してゐた渡利は、サツと顔色を變えた。耳の邊までほんのりと紅くなつた顔付で興奮して叫んだ。

『シ、失敬な事を仰しやい、私には決して罪惡はありません』

併て、ソウ力みはするものゝ、物に脅えるやうにぴくり〳〵と肩を搖つたり首を引込めたりする身體の恐怖運動は、宣告を聞いてから一層激しくなつて來た。家人は其れを激した結果だらうと思つて見てゐた。

『いゝや有る』

『いゝや無い』

二人は五六回も爭つた。が、病人を興奮させても不可ないと思つたのか、鯉江さんは語調を軟らげて、

『それでは尋ねやう、貴下は癒り度いか何うか、宜し癒り度いんだね、癒り度いんなら私が其の罪惡なるものを摘發してお目に掛けやう、そして自覺させて上げやう、けれども今日は貴下を怒らせても惡いから私は

歸る、その代り癒り度いのならば明晩御兩親や親戚を幾人でも宜いから呼び寄せて置きなさい、そしたら私の其の前で貴下の罪惡を摘發いて貴下にも腹へ入るやうにお話しゝますから』と說いた。渡利は尙ほ不興面で、

『失敬な〳〵』を繰返して居つたが、渡利の細君は其處を能く取り爲して主人の氣嫌を直し、

『それでは明晩父や親戚の人二三人を呼びますから、是非來て、癒るものなら何うかお癒しを願ひます』と賴んだ。

『今夜よく考へて、明日私の言はない先に懺悔するやうにしなさい、そうしたら早く癒りますよ』

鯉江さんは、斯んな風の白科を殘して置いて、例の朴齒の下駄音高く

カツ〳〵と出て行つた。

『ねい貴郎、罪惡つて何かしたの、ねえ?』

『うるさい!』

渡利醫院の奧座敷から斯しな言葉が洩れて來た。

◈君は妾が有らう

——十善の說明に悔悟す。
不思議や恐怖の震ひ止まる——

時は大正元年十二月二日、處は渡利醫院の奧座敷である。床の前に端座してゐるのは鯉江行者、その前に無言で控へてゐるのが渡利醫師、兩側に二人づゝゐるのは渡利の父と親戚の人々である。前日の約束に基

き、行者は渡利をして懺悔せしむべく來てゐるのである。

『義雄、罪惡があるなら言つて御覽、先生が彼の樣に仰しやるから』

『無いものは無い。有りませんと云ふより外は無い』

『貴下は何うしても無いと仰しやるが、奥さんも聞いて入つしやい、それでは私が言ふて上げる、いゝか、君は妾があらうが、何うだ、其れでも罪惡を犯してゐないと云ふのか、妾のある事が君の病氣の原因だ』

渡利の顏はぽつと赤くなつた、續いて膝がわな〳〵と搖ぶれ出した。

細君が、

『あら！』と妬ましさうな表情をする。

『君は十惡と云ふことを知つて居るか、十惡とは殺生、偸盜、邪淫、飲酒、妄語、兩舌、倚語、貪慾、嗔慧、邪見を云ふのだ、知らなきや一々

聞かせて上げけやう妾の處へ行の爲に九死の病人を放つて置いた事があらう其れが殺生だ、妾の處へ行くには先づ第一細君の目を盜んで行く其れが偸盜だ、立派に妻子のある者が妾狂をするのは之邪淫である。妾でもあれば飲酒は付き物、妄語と云つて無い事を有るやうに云ひ、兩舌と云つて虛言もつく、倚語と云つておべつかを遣ふ、妻あるに妾を置くは飽く事を知らぬ貪慾の仕業、妾でもあれば嫉妬喧嘩も起らう其れが嗔慧だ、夫妻の睦み合ひは是邪見だ、何うだ、斯う云ふ風に觀てくると、君が妾を一人圍つた事は即ち十惡を悉く犯した事になるではないか、之れ程の罪惡が犯してあつて、何うして應報が無くて濟まう、君が人力の及ばぬやうな業病に罹つたのは正に是れ因果の應報だ、之でも判らぬかッ』

思ひ當る節々の多いのであらう、十惡の說明の中頃から渡利の頭は順に低うなつて行つたが、斯後の『之でも判らぬかッ』の一喝を食ふと共に、彼はハッと平服した。

『あゝ惡るかつたです』

彼の頰には熱い涙が流れてゐた。

『懺悔します〳〵、私は妾があります、あゝ惡い事はできません』

と涙聲を振り絞つて斯う叫んだ彼の顏には、穢れたる長夢より覺めて我に返つたやうに、悔悛の色があり〳〵と現はれてゐた。心鏡一拭、彼の眼は明い輝を見せて來た。さうして彼は、妾の素性から發病の發端まで、詳しく物語つて聞かせた、その長い物語の間、不思議や彼の身體は少しも震えず、又きよと〳〵した擧動は忘れたやうにぴつたり止まつてゐた。

◈稅務署屬の相島

——肺を病める夫に辛く。
當る美しい妻の花枝——

渡利醫院の裏合せの處に相島富三と云ふ稅勞署の屬官が住んでゐた。何時の頃からか肺結核に罹り色々と手入をしたが何うしても癒らない。果ては愛知病院へも入院したが、高橋內科部長はモウ迚も恢復の見込は無いと宣告した。萬事は休す、此の上は靜に死を待つより外は無いと云ふので、自宅へ歸つて來た。けれどもモウ死ぬからと云ふて放つても置けないので、渡利醫師の投藥を乞ふ事としたのであつた。——渡利醫師

は某醫專出の醫學士で名醫と云ふのでは無いが、氣輕な人で藥が安いと云ふ事が評判になつて相當に患者を呼んでゐた——。相島は今年四十、妻の花枝は二十九で、近所でも評判の高い美しい奥さんであつた。花枝は最初の中こそ、町内の褒め草になるほど能く病夫に仕へてゐたが、永い間の病氣に少しばかりの貯金は無くなつてしまふ、夫はモウ助かりさうな模樣もない、來る日も〳〵滅入つた空氣の中に在つて看護を續けて行かねばならぬことが、近頃彼の女には忌やで〳〵、堪らなくなつて來た。隣の細君が結ひたての髪に大島の對の羽織と着物を着込んで、

『一寸公園まで遊びに參りますから宜しく』と留守を賴みに來た時などは、

『一々病夫を置き去りにして飛び出さうかしら』と云ふやうな淺間しい

考さへ胸に浮んだのであつた。さうしてソンナ時は何時も自分の容貌を誘る彼の女の心がむら〳〵と頭を擡げた。病床の富三も花枝のコボす愚痴を聞いては、あゝ可笑さうな女よと同情せずにはゐられなかつた。從つて妻を使ふにも少なからず遠慮氣兼ねをするやうになつた。近頃は自分の吐いた唾の始末も妻を使はないで自分でするやうになつた。衰へ切つた體をよろめかせながら——。

『あ危い、私が遣るから宜いじやありませんか寢て居らつしやいよ』

と富三が唾を捨てに行くのを見て、花枝が斯う云つて抱き止めた事も毎〻あつた、それが近頃は段々言葉が粗雜になつて、ソウ云ふ處でも見付けやうものなら、險しい目元でじろりと瞰め上げ、

『危いじやないの、寢てゐらつしやいッてば、ひよろ〳〵の病人の癖

に』

などゝ叱り付けるやうに言つては舌打を打つやうになつた。

『何うせ癒らぬものなら早く死に度いものだ、永い病氣で、お前に苦勞をかけて何とも申譯が無い、ねエ花枝』

『ソンナ愚痴を毎夜言つたつて仕樣が無いじやないの、もう早くお休みなさいよ、私、ほんとに貴郎の事から洗濯から藥取りからで勞れちやつて、眠くて話しなんかチツトも聞き度かない事よ』

斯んな會話が、隣家へ洩れて來ることもあつた。

◈昨夜から耳鳴が

——渡利が無意識に足を踏んだ。

『あら！』と見上げた花枝の眼には魅力が滿ちてゐた——

氣さくで評判の善い渡利醫師は、一日をきに夫の藥を貰ひに來る花枝とも懇意になつた。その中には、

『あ、相島さん、御面倒ですが一寸鳩に餌を遣つて呉れませんか』

などゝ用事さへも頼むやうになつた。花枝も狎れるにつれて、渡利醫院へ來ることを、自分の實家へでも歸るやうに樂しみの一つに數へるやうになつた。さうして時には、

『先生、新守座は宜いんだつてね、一晩お供しましやうか』

など丶玄人のやうな冗談をさへ言ふやうになつた。

或日の事であつた。藥を貰ひに來た花枝は、昨夜から何うも耳が鳴つて困りますからと云つて渡利に診察を乞ふた。

『ふうむ、それじや一寸……』

と云ひながら渡利は花枝を椅子に掛けさせて、額帶鏡と綿棒を取つた。

花枝は左へ首を少し傾けた。渡利が綿棒に酒精を泌させて、花枝の横に向つた時、其處には花枝の所有するくつきりとして襟足、塗黑の房々とした髮、瑪瑙のやうな艶さを見せた耳、滑かな而してデリケートな軟か味をもつた皮膚が……現に展開されて居つた。餘りの華やかさ、餘りの美しさ、餘りの艶やかさに、渡利はじつと我を忘れて花枝の横顏に見とれてゐた、

『美しい、斯んな眞劍の美人が何處に在らう』

と心の中に呟きながら――。が、その中渡利は更に綿棒に酒精を浸し直して、また彼の女の左耳に向つた、其の刹那、何うしたものか花枝の足を踏んだ。

『あら！』

と花枝が驚いてふと渡利の顏を見上げた時、媚を含んだ魅力のある花枝の視線と渡利の視線とがぴつたり合つた時、二人はにつと微笑んだ。而して其の夜渡利は何處かで遲くまで遊んで來た。花枝も其の夜は家にはゐなかつた。

◈待合の離れ座敷

——花枝の家を明けた夜。
富三は澤山血を吐いて人事不省に陷つた——

公園の或る待合へ二人連れの客が來て離れの四疊半へ通つた。女は奥さん風の素人であつた。別に大した料理も取らず只だ酒と一寸した二三種の小鉢物位で、何やらひそ〳〵と二時間の餘も語り合つてゐた。先刻命じて置いたお銚子のお代りと茶碗蒸とが來た。女中が居る間は、二人は話をぴつたり中止して何時までも行儀よく餉臺に向ひ合つてゐた。男と女中との間に一二回盃が交換されると、

『一寸話があるからね……手を叩くまで來ないで呉れ給へ……、お、姐さん之は少ないが……』

と一圓札を二枚して男は斯う女中に言つた。

『じや何うぞお願ひします』

と叮嚀にお辭儀をして立ち上つた女中は、ちらりと意味有り氣な視線を二人の上へ落して出て行つた。

女中が出て行くと直ぐ男は、

『あゝ酔つ拂つて來た』

と獨語を云ひながら頰杖をついた。もう上機嫌である。

『そう、じやあ膝枕にでもなりましやうかね』

と魅力に富んだ視線を男に投げかけ乍ら女は斯う言つた。男は酔眼を細目に開けて、

『ふゝ何う致しまして、それでは餘り相濟みませんからね、立派な官吏の奥さんに……併し奥さん、はゝゝゝ奥さんが氣に入らなきや何方樣でも宜いとして、兎に角御主人樣はお氣の毒ですが、もう十日がものはありませんよ』

『あら、憎らしい口をお利きなさる事ね、忌や味ばつかり、さう云つて戯談はれるのが辛いから私一日も早く死んで呉れゝば宜いにと初中終思つてるのよ』

『己れッ！』

蒲團を蹶つて、護謨仕掛の人形のやうに飛び起きた富三は、之が自分の居室であるのに氣が付くと、

『おゝ今のは夢か、恐ろしい夢だ、何と云ふ口惜しい夢であらう、花枝奴又今夜も歸らぬらしい、今の夢の通りに彼の藪醫者奴と……うむーむ苦しい』

富三は頭を拘えた儘、どたりと轉ぶやうに蒲團の上に倒れたが、手足を藻掻ながら、

『うむーむ、畜生！己れ、ざ、殘念だ……』

と續けて叫んでゐた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

餘りに唸き聲が激しいので、兩隣の人達が駈けつけてみると、富三は枕元一面に澤山の血を吐いて殆んど人事不省に陷つてゐた。

十二時過ぎに花枝は歸つて來た。さうして留守の出來事を聞いて、何とも申譯が無いと涙を流して居並ぶ人々に詫びた。夫の體を搖ぶつて、涙聲で色々と詫びたが、富三はモウ口も利けなくなつて、只だ涙を眼に一ぱい浮べてゐた。

◆相島富三の幽靈

——五月雨降る或夜の事。
渡利は紅葉狩の袂で震え出した——

花枝が家を明けた其の夜、澤山の血を吐いて人事不省に陷つた相島富三は、その狀態を一週間續けて遂に死んだのであつた。その重態の一週間の間にも、花枝の明るい笑ひ聲が日に一度位は必ず渡利醫院の診察室

で聞かれた。

近所の人々は富三の死には誰も彼も同情を寄せた、而して其れ等の人々の間には、

『渡利さんが一服盛つたんだ』

『うむ、きつとソウだ』

などゝ云ふ言葉が私に囁き合はされてゐた。

型ばかりの葬が行はれてから三日ばかり過ぎると花枝の姿は其の町から消えた。四日目に悔みに來た處が空家になつてゐるので憤慨して歸つた稅務署の彼の同僚もあつた。

花枝が姿を隱した頃から渡利醫師も毎夜宅を明けるやうになつた。

* * * * *

じめ〳〵と降り續く五月雨で、誰の氣分も滅入り切つてゐる或る夜の事診察をそこ〳〵に片付け終つた渡利義雄は前夜と同じやうに、

『一寸』

と看護婦に言ひ殘したゞけでふいと表へ出た。外には細い雨が濛々と煙のやうに降つてゐた。彼の行き先は、相島富三の死後四日目から妾として圍つた花枝の許であることは看護婦の岡井には能く判つてゐた。桑名町から電車に乘つて新榮町で公園線に乘り替へ、公園前で下車した、彼は、電車が進むに從つて順に淋しい町になることが、今日は何んだか非常に心細いやうに感ぜられてならなかつた。花枝の處は公園前から細い道を南へ出ると、幅二間ばかりの川とも溷ともつかないやうなものゝ端へ出て、それに沿つて南へ數丁、さうして紅葉橋と云ふ小さな土橋を渡

ると間もなくである。

此の邊は夜はいつも森閑としてゐる燈火と云つても處々に一つづゝ石油の門燈が見える位で、對岸は大きな屋敷ばかりで、松の立木が林のやうに繁つてゐる。此方は立木こそないが、機械工場や小さい家ばかりである。公園前で電車を降りた渡利は、眞深に冠つた中山帽と蛇の目の傘とで顔を隱しがちにしながら、川端へ出た、通る人とては一人も無い、濛々と降りしきる梅雨は一丁先は見へないほどの霧を作つてゐる、遠くで鷄の鳴く音が聞えた。

『いやに淋しいな、何處かで鷄が鳴く、夜鷄は惡いと昔から云ふが何んだか氣味が惡い、斯んな夜は花枝もきつと淋しがつてゐやう、あゝさうだ今日は富三の四十九日だな、忌やな日に出掛けたものだ、さうと知つ

たら今夜だけは止すのだつたになあ』

斯んな事を考へ〳〵紅葉橋の袂まで來た。そこへ一陣の風がヒユウと吹いて來た、對岸の松の梢がザア〳〵と鳴り出した、

『おゝえらい風！』

前へ差し掛けてゐた傘が風に呷られて後へ反つた。はッと思つて仰向く刹那、彼の前、紅葉橋の中程へ、ぬうッと相島富三が現はれた。

——例の折襟の制服に、抱茗荷の徽章の付いた制帽、髯蓬々の青い顏口惜しさうな其の目、それらが、はつきりと見えた。

『あッ！』

渡利の全身の毛は慄と立つた、頭から冷水を引被つたやうに彼は其處へ立ち蹲んでぶる〳〵と震ひ込んでしまつた。

◈心を清く持直す

——妾を廢め相島を弔ふた
渡利は遂に廿五日で全快した——

渡利は妾との關係を鯉江さんの前で詳しく語つて、紅葉橋の袂で相島の幽靈を見てから、斯うした病氣になつたと自白した。聽いてゐた人達は此の活きたる怪談に、氣味の惡い寒さを覺え首を縮めたのであつた。

『あゝ其りや恐ろしい應報だ』

渡利の父は今出來た事かのやうに斯う嘆いた。一番末席に控えてゐた細君も、

『そりやあ罪なことをしたものねい』

と寧ろ妬ましいのを忘れて相島に同情するやうに言つた。モウ口利く者は無かつた。座敷はひつそりとした。心から悔いたる渡利は只だ無言で顔も得上げずに涙を流してゐた。そこで鯉江さんは徐ろに靈と肉との關係を說いて聽かせた。而して此の際衷心から懺悔をすると共に、相島の爲に法會を懇に營めと勸めた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌日鯉江さんは、花枝を訪れて行つて、幾らかの手切金を遣つて渡利との關係を絕たせた。鯉江さんの話を聽いてゐる內に女はしく〳〵と泣き出した。而して之からは鄕里の信州飯田へ歸つて淸い生活をすると誓つた、手切金が極く僅で片付いたのも女の良心の蘇生つた。一つの證であつた。

花枝を手離し、相島の法事を營み、心を淸淨に持ち直した渡利は二月二十五日、鯉江さんに初めて來て貰つてから恰度二十五日目にさしもの業病も全く平癒して全快祝をすることができた。

渡利は其の時年三十。全快と共に彼の玄關は又舊の通り賑ふやうになり、今でも相當の信望を得て流行らせてゐる。（をはり）

女將の身投げ

◈馬鹿の五段返し

――材木商の北屋は艶次に打ち込んで今までの信用を失つた――

三河の岡崎に北尾と云ふ材木商があつた。主人の德兵衛は町でも信望の篤い人で、身持の固い律義一徹の男であつた。處が、年に五六回宛、熱田の白鳥へ集る御料林材を買出しに行く中に、仲間の宴會で見たのが疾みつきで艶次と云ふ藝者と深くなつた。艶次は住吉町の橘家の抱えで附近では姐さんとして相當に羽振を利かせてゐた。物固い男が一度び女に心を奪はれると有頂天になるのは昔からの定則である。德先衛も遂

に其の定則に支配られて、妻子を殆んど忘れるまでに艶次に打ち込んでゐた。艶次はソンナに義しい女では無かつたが、併し何處へ行つても相當姐さん面をしてゐられるのが德兵衛には矢鱈に嬉しかつた。だから艶次が、顏に不均合なほど大きい彼の眼を少し細うして、幾分黑味掛つた彼の唇の邊りに愛嬌を浮べて、

『なも旦那樣……』

と話しかければ、德兵衛は何んな無心でも、何んな阿呆氣た藝當でも、必ず御意の儘になるのであつた。けれども艶次は德兵衛を少しも眼中に措かず、只だ「金を吐き出す人形」だ位に思つてゐた。而して德兵衛から絞り取つた金は、彼の女の情夫の千歲座の紅村と云ふ新派俳優の懷へ流れ込むのであつた。德兵衛が艶次に打ち込み出してから一年ばかり過

ぎてから名古屋新聞の情界消息の欄に「馬鹿の五段返し」と云ふ標題で斯んな意味の記事が出た。(其の頃は恰度萬松寺の菊の眞盛りで、菊人形の何段返しかゞ呼び物になつてゐた處から斯んな標題を付けたのであらう)――。

千歳座の紅村は二年から自分の唯一の弗箱として拜んでゐた艶次を捨てゝ何處に何うした譯があつてか竹子に乘り替へた。竹子に腕も金も容貌も何の長所があらう、一段返しは紅村の馬鹿。今まで二年間も注ぎ込んだ紅紅を人もあらうに、アノ雛子藝妓の竹子に横取りされて、艶次は何の顔で『ハイ姐さんでございい』と濟ましてゐるであらう、二段返しは艶次の馬鹿。艶次は何うせ他人の金、未だ諦むべしとしても紅村があるとも知らず岡崎くんだりから艶次の許へ、寄附金を仰せ付

かりにお百度を踏む北尾某は又と世にあるまじき目出度さ加減では無いか、三段返しは北尾の馬鹿。其の又北尾に一人の弟があるいゝ年をしながら兄哥と同居、而して親から分けて貰つた不動産をちよい〳〵兄哥にして遣られてゐるとは之も赤目出度き限りにこそ、即ち四段返しは北尾某の弟の馬鹿。相當賣れるに拘はらず兎角蒲柳の質とあつて借金の重荷は愈々嵩み、今にも板びつしやけにならうと噂されてゐた竹子は、紅村を占領して天晴れ〳〵と褒めそやされた間もあらせず、紅村が何處かの塹壕を徘徊ついて吸込んで來た毒瓦斯に中毒し茲一月は働けまいとの話、ヤレ可愛いや、五段返しは竹子の馬鹿。此の舞臺は之を以て終りとしお次の舞臺へ御運びを願ひます、ピリ〳〵。

◆艶次落籍さる

——五段返しの記事で艶次の人氣は落ちた。德兵衛は切られると力み出した——

藝妓、娼妓、仲居、斯う云つた種類の者に、定まつた情夫ができれば人氣は急變して必ず落ちるのが情界の常である。紅村と關係があつた名古屋新聞に書かれた事は艶次の人氣に非常に觸つた。殊に紅村との關係を名古屋新聞で始めて知つた——之は艶次が紅村と交る二年間、如何に巧妙に立ち廻つてゐたかを物語るものである——料理屋や待合の女將女中と云つた連中は、何だか艶次に「出し抜かれた」と云ふやうな感んに打たれた」而して云はゞ其の反感と云ふやうなものなのか、今迄のやうに艶次を贔負にしないやうになつた。それが艶次には大分手痛く答えた。

德兵衛も「馬鹿の五段返し」の記事を見ては流石に腹立たずにはゐられ無かつた。新聞を見た翌日早々宿坊の萩廼家に艶次を呼んで、遂ぞ見た事も無い恐ろしい權幕で艶次に當り散らした。髪を切るぞとまで力んだ。けれども其の場は女將の取なしで大した事もなくも濟んだ、而して德兵衛は三河へ歸つた。

人氣は落ちる德兵衛の御機嫌は損ずる、艶次も其の後は聊か悄れざるを得なかつた。

『此の儘で行つたら何うなるであらう』

などゝ末の事までも考へて氣を腐らしてゐた。二月ばかり過ぎてから

徳兵衛は又名古屋へ出て來た――其の間彼は一文の小遣も艶次には與へなかつた。――而して艶次に會つた。が未だ心は解けてゐないと見え、紅村との關係に就いて忌や味をゴテ〳〵と並べた。けれども悄れ切つてゐた艶次には、

『勝手にしろ茶瓶頭奴』

と云ふやうな元氣は――今までは徳兵衛が妬いたりなどすると斯んな陰口を能く利いたが――戯談にも出なかつた。今夜は其の茶瓶頭が心から尊いものゝやうに思はれた。酒が廻るに從つて徳兵衛は紅村との關係を愈々諄う言ひ募つて、果てはもう手を引くとまで言ひ出した。機嫌を直すに困うじ切つた艶次は、此の時稍々昂奮した顔付で、

『へい〳〵判りました、だけどなも、旦那様、私が斯んなに怒られるのも客商賣をして居るからじやぞえも、何うせ客商賣して居りや、人は色々言ふぞいも、それでなも、私のお願いじやが、一つ私を落籍して頂戴か、ソウしたら私がソンナ浮氣女か何うか、きつと判るになも、私も今切れるのはほんとに辛あいでなも』

と切り出した、そして例の魅力のある眼光を覗き込むやうにして徳兵衛に投げた。艶次の言葉には眞劍に決心してゐるやうな閃きが見えた。

徳兵衛は忌味ッたらしい微笑を口の處にちらッと浮べて、

『ふうむ』

と答へたゞけで、默つてしまつた。下の座敷で日吉を稽古してゐる同家の娘の聲が手に取るやうに聞えて來る。――

* * * * * *

御園座の近くに「きのえ」と云ふ待合を艶次が開いたのは、それから一月ばかり過ぎてからの事であつた。金主が德兵衛であることは言ふまでもない。

◆妾の入水

――本妻は人型を作つてのぶを呪つた。妾は遂に氣が狂つた――

春將に逝かんとする或日のこと、鯉江行者の處へ三十五六の粹な女が訪ねて來た。而して、

私は去年からリウマチスと子宮と腦と胃と四つの病氣を起して、出來るだけの療養はしたが何うも癒らない、或人から先生の事を聞いたので

何うかして癒して戴かうと早速賴つて來た』

との事であつた。疾み瘦れてはゐるが、見れば見るほど垢拔のした女で玄人である事は誰の眼にも直ぐ知られた。行者は例の感應に依つて、直ちに、

『お前は人の妾になつてゐるのだらう』

と看破した。而して一夫一婦論から說き起して女の使命なるものに論及し、

『お前の此の病氣は四つであるが、病根は只だ一つだ。お前の過去現在の罪惡と、旦那の本妻の恨みとの應報から來てゐるのだ』

と結論した。時々、

『よう當るなも』

『へーい其れが判りますか』

などゝ感心して聞いてゐた彼女は、

『實は私はなも岡崎の人でなも……』

と身の上話から始めた。丹下のぶと名乘る此の女は、實は御園の待合、「きのえ」の女將で元の艶次であつた。かぎは行者の熱誠に動かされて何も彼も殘らず話して終つた。大略は斯うである。——

旦那の德兵衛は非幸にのぶを可愛がつて呉れる。さうしてのぶの兄弟も夫々世話して呉れた。長く交際つてみると德兵衛は全く人柄であり心の清き親切者であることが判つたので、のぶも心底から德兵衛を大切にするやうになつた。處が德兵衛の家内は世にも稀な嫉妬深い女で、時々

「きのえ」へ怒鳴り込む。而してのぶは近所界隈へ顔出しもできぬほど赤耻を掻かされたり、體裁の惡い目に何度會つたか知れなかつた。客の中には、

『金を遣つて嫉妬喧嘩の仲裁は堪らぬからな』

と云ふやうな事で、來なくなつた人も幾らもある。月々の仕送りを殆んど無くしたのも本妻の細工なれば、親戚の威光を藉りて德兵衛の自由を奪ふのも本妻である。が、それ等は未だ宜いとして、本妻はのぶを祈り殺さうと云ふので毎夜〳〵人型を切り拔いて、其れをのぶに假定へ、針で突いたり青松葉で燻したりしてゐる事も判つた。のぶもモウ三十九にもなつて今頃藝者に出やう譯にも行かぬので近頃は自暴自棄のやん八で德兵衛に濟まぬと思ひながら、再び捻を戻して俳優の紅村と往來して、

其れで漸く荒み切つた心を幾分慰めたり軟げたりしてゐる。

今先生から現在の罪惡を說かれた時紅村の事を言ひ出されはせぬかと、、、はら〳〵した。私はモウ救はれない女でしやうか。

語り終ると遂にのぶは泣き伏してしまつた。

『藝者が妾になるのは何處にもある事じやないかいも、えゝほど耻を搔かされて其の上呪はれて、而うして今度の病氣じやうあぎあも、此の病氣も本妻が呪やがつたお陰じやと思ふと、私はもう忌ま〳〵して〳〵、斯んな事をしやがるなら覺えて居れ、旦那は何んな事があつたつて手離しやせぬに……何うかしてモ一度癒つて此の仇討をして遣り度いと思ふはえも、止して頂戴〳〵、懺悔なんか、何んな事があつたとて私や懺悔

はしやしません、死んでも構やしません、私も祈り返やしてやります』

行者が懺悔せよと勸めたのに對してのぶはヒステリックな調子で、行者が當の本妻でゞもあるかのやうに――斯う泣き喋りに喋つて、齒を食ひ縛つて泣いた。

× × × × × × ×

身投げ女は

きのえの女將

自暴自棄から氣が狂ひ

と云ふ標題の記事が新聞に現はれたのは其の翌月の事であつた。

之は大正六年夏の出來事である。（をはり）

疑問の猿股

◆町長辭職の理由

——ことは世にも珍らしい嫉妬深い女で夫の顏には常に生傷が絶えなかつた——

名古屋を去る程遠からぬ或る町に佐伯某と云ふ資產家があつた。女房はさと云つて今年四十二。何うしたものか二人の間に子供が無い、某は其の町でも非常に信望があるので町長に選ばれた事も數度あつた。が何時も任期を滿了した事は無くて、きつと途中で辭職するのが常であつた。町政が紛亂するのでもなければ、別に反對者があるのでも無いのに郡長などは何時も彼の辭職を不審に思つてゐた。けれども役場員や役

塲の小使や、彼の家庭を知つてゐる者は、彼の辭職の理由を能く知つてゐて、

『佐伯さんの奥さんには因つたものだ、佐伯さんは氣の毒なものだ』

と誰も彼も彼に同情を寄せてゐた。

佐伯の辭職理由は何？……と云ふ事に少し注意を拂つて觀察する者には、それが細者の世にも珍らしい嫉妬家であるからだと云ふことが直に頷かれるのであつた。それは彼が何かの會合が遲くなれば必ず呼び使を寄越すのでも判る。宴會でもあると、藝妓のゐるにも拘はらずどし〳〵座敷く入つて來て遮二無二彼を拉し去るに徵しても明である。それが宴會半であらうとあるまいとお構ひ無しで、其の上會衆の前で、

『貴郎は何と云ふヘゲたれ』

であらうとか、

『いゝ年して何時まで三味線の音に聞き惚れてゐます』

とか、あらゆる毒舌を吐くなど恰で狂氣の沙汰である。

そんな事が二度三度續くと佐伯も面目なくてもう役塲へは出られなくなる、出なければ町政は運ばない、そこで辭職。之が佐伯の町長を退く時のお定まりの筋書であつた。

『如何に糠三の身の上でも佐伯さんのやうな目に逢つてゐる人は廣い世間に又とあるまい』

とは、藝妓達の笑ひ話の中に時々現はれる言葉であつた。

だから彼は、何か問題が起つて彼が町長に就任するので無くては町が治らないと云ふやうな時でなくては決して町長の椅子には就かなかつた

而も其の就任に方つて最も骨の折れることは妻さとの諒解を得て其のお許しを受ける事であつた。町の有力者などが來て佐伯に起つて貰はねばならぬ理由を懇々と說くと、何時もさとは夫の町長たることを是認したものである。而して初の間は主人の出掛ける時や歸つた時の送り迎えにも極めて愛想が宜いが、三月も經つともうぼつ〳〵猜疑心を起して來て夜の出掛には一々行き先を故固く聞く、晝間でも少し善い着物を着て出掛けやうとすると、兎や角と嫉妬の焰を上げる、それが嵩ずると泣く、喚く、飛びついて搔きむしる、終には ヒステリーを起して寢込む、之が佐伯の退くまでの、さとの決つた筋書であつた。

◆おや！猿股の綻

——榮町の電車乘換で……。

さとは狂人の如く暴れ狂つた——

或る月の朔日であつた。佐伯は一寸した外出の着物を着て、熱田神宮へ參拜しやうとして例のお許を仰いだ。朔日の熱田參りは例月の事とて女房も快く、

『行つてらつしやい』

と答えた。佐伯がヤレ〳〵今日は凪だわいと心秘に喜んで出掛けやうとすると、

『ねい貴郎一寸待つて下さい』

と女房が呼び戻した。而して彼の着物を脱がせて、猿股と襦袢とを縫ひつけ（彼の女は今迄にも折々斯し云ふ事をした）再びモトのやうに着物を着せてから、

『さあ行つてらつしやい、寄道しないで早く歸つて頂戴よ』

と言つた。佐伯は又始まつたなと云はぬばかりの顏して默つて戸口を出た。

× × × × × × ×

佐伯が郡部線から市内線に乘替へ、更に榮町伊藏呉服店の處で熱田線に乘替へやうとして電車へ片足を掛けるとビリ〳〵と云ふ何處か縫目でも綻びたやうな音がしたが、何分朔日で電車は酢詰の身動きもならぬ有

樣だから何處が綻びたか檢べてみる譯にも行かぬので、其の儘にして、參詣を濟ましし、而して女房の注文通り一切寄道ちをしないで、歸つて來た。歸りが早かつたとて女房は非常な喜びであつた。

佐伯が、着物を換へにかゝると、女房は何時もなく燥いだ調子で、いろ〳〵と取り持ち、不斷着などを持つて來た。が、彼が襦袢を脱ぎに掛ると、

『あら！貴郎は何處かへ寄たんでしやう、ふゝ口惜しい、何處へ寄つたんですッ！嘘仰しやい！御覽なさいよッ之を……』

女房は甲高い聲で喚き立てた、何が何だか薩張判らぬ佐伯は、

『御覽なさい之を……』

と云はるゝ儘にフト其處を見ると、南無三、女房が縫ひ付けて置いた猿

股と襦袢とが離れて居る。

『はゝあ之だな』

彼は榮町伊藤呉服店角の乘替でビリ〳〵と云つた音を思ひ出して斯う言つた。

『何が「之だな」です！相手は何んな女です？えゝ忌ま〳〵しいッ！』

ヒステリックな女房の顏には一層の凄味が加はつて、嗔恚の焔を燃やしてゐる。泣く、喚く、引つ掻く、暴れる、もう手の付けやうが無い、果は井戸端へ走り出して飛び込まうとする。近所の人々が騒ぎを聞いて駈けつけた。

その日からさとは重い枕の床に就いたのであつた。

◈女は重態に陥つた

——三毒煩惱を説かれて
さとは釋然として解脫した——

猿股の綻びから嫉妬を起して發したさとのヒステリーは日を經るに從つて重態となつた。醫師も此の分では生命に關するであらうと注意した佐伯は非常に困惑して勸める人のあつたのを幸に鯉江さんを迎へて平癒の途は無いかと相談してみた。

鯉江さんは病人を一目見て、

『何之は心さへ改めれば直に癒る』

と事も無氣に言つて退け、病人に向つて說法を始めた。さとは、最初の

中は、何だか譯の判らぬ事を喋つて泣いたり笑つたり怒鳴つたり狂人のやうにしてゐたが、終ひには追々靜つて來て、行者の言ふ事に耳を傾けるやうになつた。

『苦しいか。ふーむ、それが當然だ。罪科もない亭主の後を尾けたりなどするのはお前の我儘の致す處である。お前が足も動かぬ、腰も立たぬと云ふやうになつて苦しむのは、正にお前の我儘に對する應報である。貪、嗔、痴、之を佛者は三毒煩惱と云ふ、貪とはムサボル事だ、貪るとは金錢ばかりを云ふのでは無い、お前のやうに我意を通さうとするのは之りや貪じや、嗔は腹立つこと、痴は愚痴邪見だ……』

行者は誠心をこめて懇々と彼の女を說いた。

釋然心に悟る處があつたと見え、彼の女の顏には明るい笑が浮んだ

解脫の力の尊さよ。

其の翌日からさとの病氣は、陽に溶ける白雪のやうに日一日と癒つて行つた。

之は大正四年の出來事で、佐伯は今熱田新田に有福な樂しい月日を送つてゐる。（をはり）

君　奴

◈狐憑か蛇憑か

――夫の出征した留守にお靜は、發狂した。そして行者の荒療治を受けた――

大正七年夏、夫が第三師團から西伯利亞へ出征したので、家を疊んで名古屋西境町の實家へ歸つたおしづは、其の年の暮から腦を疾んだ。而して東山腦病院や名古屋腦病院へ永らく入院してゐたが何うしても癒らない。それに母親が、

『斯んなにお金が要つちや遣り切れない』

と毎日のやうに愚痴すのが辛いのとで、大大八年の六月頃からは實家へ

戻つて靜養に努めてゐた。其の中何うした事かおしづは取止めのない妙なことを喋り出したり、泣いたり笑つたり、妙な手付をしたりするやうになつた。

『氣が狂つたのだ、氣が狂つたのだ』

此の春夫に死別れたおしづの母はおしづの此の樣子を見ては流石に斯う慌て呼ばずにはゐられなかつた。近所の人は勿論、親戚の者も呼び寄せて色々と協議してみると之は狐が憑いたのであらうと云ふに衆議は決つた。而して其等の人々は狐憑きにはコウすれば宜い、アヽすれば宜いと實例などを引いて口々に色々な方法を敎へて呉れた。お袋のお政は、方法を聞いたゞけで、其の中の何れかゞ狐が離れるものゝやうに思はれて嬉しかつた。其の翌日からは硫黃を燻してみたり、唐辛子を燃して跨

がせてみたり、近所の人を賴んで來て爪に灸をすえてみたり、教へられた方法を片つ端から實驗して見たが、病勢は愈々募るばかりで少しも効果は無かつた。髪が滅苦〳〵になつてゐるのでお袋が少し束ねて遣らうとすると、

『之は尻尾だから觸つちや忌やよ』

などゝ言つて泣き出したりした。それかと思ふと其の後誰かゞ來て、

『女には蛇がよく憑くと云ふが若しや蛇が憑いてるのじやあるまいか』

とお袋に話したのが動機になつて、近頃は體をうね〳〵さして蛇のやうな身振を見せるやうにもなつた。狐か蛇か、近所でも大評判になつた。眞劍に困り出したのはお袋である。遂には家の宗旨を眞宗から法華に改へて、法華宗の利益に縋らうとした。いろ〳〵な種類の行者にも平癒を

依賴した。或る行者はおしづを一晝夜縛つて置いて讀經しては脇の下を捻つた——それは狐は脇の下にゐると云ふ行者の主張からである——それが爲におしづは一晩中ひい〳〵と泣いた。近所の人達は其れを垣間見て、

『おゝ慘しい事を』

と囁き合つた。が、そんな事は何の役に立たう筈もない、おしづの病氣は惡くなる一方であつた。

◆ホ、敷島は忌や

——爪の灸の熱さに逃げ出した

おしづは鯉江行者の宅へ駈け込んだ——

今年の七月の或る夕暮であつた。鯉江行者の家で夕餐に取り掛ると、

『犬奴糞』『ど狐め何處へ失せる』『ソレ其方だ』と云ふやうな怒聲罵聲と甲高い若い女の泣き呼ぶ聲とが入り混つて騷しく聞えて來た。

『おや何んだらう！』

と驚いてゐる間もあらせず、黑髮房々と振り亂した若い、一人の美人が泣き喚いて飛び込んで來た、續いて殺氣に滿ちた怒聲、罵聲が戸口まで押し寄せて來た。

『貴樣等は何者だ！』

行者は箸を握つた儘突立あがつて一喝した。戸口の手合は其の氣勢に呑まれて、ピタと聲を止めた儘、默々として突立つてゐる。

『見れば可愛さうにコンナかよはい女を捕えて……一體何うしたと云ふ

んだい』

行者は少し落着いて質し初めた。すると、

『いえ什うも飛んだ御迷惑を相掛けまして……』

四十五六の稍赦ら顏の肥つた女が面目無さそうに行者の前へ出て來た之はおしづのお袋であつた。飛び込んだ美人はおしづである。

おしづのお母はおしづの病氣の經過やら、今日までの苦心やらを話して、今も近所の人樣に手傳つて戴いて爪に炙をすえてゐると、暴れ出してお宅へ逃げ込んだのですと口の兩端に泡をためながら詳しく說明したお袋と行者と話してゐる間おしづは、

『ほゝゝ私は敷島は忌や、朝日が宜いの』『あれ木村さんでしやう、木村さん、ねい木村さん、いゝわよう、ほゝゝ』『でもねい、淋しいわ、淋

しいわ』

などゝ取りとめも無い事を喋つては泣いたり、笑つたりしてゐる。美しい、併し青味のある――彼の女の顔が、瓦斯燈の光を溶びて一層の凄味を見せてゐる。

試に行者が、おしづの手を取つて見ると、兩手とも二本の指の爪は炙の爲に燒き剝がれて其の下が爛れ膿んでゐる。

『おゝ可愛さうに……』

行者は思はず呟いた。而して今度は、おしづのお母や、追駈けて來た人々に向つて、發狂以來取つた方法の何れも迷信であつて、病勢を昂めこそすれ少しも益の無い事、狐憑きでは決して無いと云ふ事や、生きてゐる者にコンナ無法な手段を加へて、若し其れが爲におしづが死んだらお前等は法律上の罪人にならねばならぬぞと云ふ事やを懇々と說いて聽かせて、而して之は自分が必ず全快さして遣るから氣長に待つて居るやうにと勸めた。

◆あら何うしたの

――おしづの狂亂は行者の娘へ移つた。それで女の死靈の祟りと判つた――

行者は、自宅の神前の前におしづを座はらせて、聲高らかに「高天ケ原に神ります……」と禊祓を讀みはじめた。おしづのお母や追手の人々も畏つて聞いてゐた。滿座いきとし聲なく、崇嚴の空氣は祭文の進むに從つて濃くなつて行く。禊祓が濟んで大祓に移り、

「母の犯せる罪、子の犯せる罪、母と子と犯せる罪……」

の邊まで行くと、次の間で餘念なく裁縫を勵んでゐた行者の娘の房江が、

『きやッ』

と叫んで神前へ轉り込んだ。一座の人々も思はず、

『ひやアー』

と叫んで總立ちとなつた。

『あれ〳〵』

と騒いでゐる中に房江は恐ろしい相恰と狂亂の態で、おしづにしがみ付いた。祭文を中止し、じつと此の有樣を見てゐた行者は此の時、

『やッ！』

と氣合の一喝を與へて、

『よし〳〵判つた、おしづには女の死靈が憑いてゐるのだ』

と落着拂つた口調で言ひ放つた。一喝と共に房江の苦しみは急に止つた而してけろりとした顏をしてゐる。房江の狂亂中、おしづは其の反對に極めて平靜に歸つて、

『あら何うしたの〳〵』

と言ひながら房江を靜めやうとした、その動作や言葉は眞人間と少しも異る處は無かつた。此の不思議な現象に、今度は並みゐる人々が却つて狐に憑まゝれたやうで、誰も彼も尙ほ夢中に徘徊つてゐた、

房江は行者の二女で年十九、女學校を今年出たばかりであるが世智に慣れてゐる點に於て近所の褒め者となつてゐる、體質の丈夫な、樂天的

な心を持つた美しい娘であた。

× × × × × × × ×

女の死靈、それが何者の死靈であるかゞ判らなかつた。おしづは狂亂してゐるから悟つたり考へたりするすべくも無い。お母にも心當りは無かつた。そこで行者は、

『それでは兎も角も、柳を祭つて其れを死んだ女の靈になぞらへ、朝晩供養せよ、而して其れと同時に毎日何をお供へをして、アトで其れを近所の子供にでも施したら宜からう、それが即ち佛者の曰ふ十善の中の施食である、其れを根氣よく續けて行けば必ず怨靈は退散するであらう』と敎へ諭した。目の前で恐ろしい法力の驗を見せられたお母は、恭しく其れを聽かずにはゐられなかつた。

◆あゝ情けない姿

——おしづの夫岡本は凱旋した。『違ふ〳〵私は朝日が好き』——

おしづが行者の敎を乞ふやうになつてから一週間ばかり過ぎての事である、西伯利亞の野で惡戰苦鬪、君國の爲に盡して來たおしづの夫岡本某は、目出度名古屋へ凱旋して來た。肩の星が一つ殖えて上等兵となつて歸つた事も彼には一つの故郷へ錦を飾る誇であつた。出征中彼は恐ろしい寒さとも戰つた、嘗て經驗の無い苦熱にも晒された、砲煙の間、重務の中、隨分多くの苦心を經たものである。而してソンナ塲合に彼の腦

裡へ浮び上るものは名古屋で淋しく自分を待つてゐる美しいおしづであつた。任務を果して勳偉赫々、意氣揚々と名古屋へ凱旋した彼は、除隊となると先づ最先におしづの實家へ足を向けたのであつた。

『會つたら先づ第一に何を話さう、お母の手前餘り甘い顏ばかりも見せられず……そうだ、凱旋や除隊の日を通知したにも拘はらず出迎ひに來なかつた、それを一つ言つて遣らう、停車場へ着いてもおしづの顏は見えず、今營門を出るにもお母の顏さへ見當らないなどは全く不都合だ、さう云へばアノ片岡上等兵の奴だ、今日なんか、おしづが來て呉れたら彼奴の日頃の嫌自慢の鼻をへし折つて遣るのだつたになア』

いろ〳〵な空想に耽りながら急ぎ足でおしづの宅まで來た。

『御免下さい』

張物をしてゐたお母は其の聞を見付けて、

『あれ岡本さんか、まあ〳〵まあお上りやす、何からお話して宜いやら……』

言ひつゝ冠つてゐた手拭を取つて、

『それでもマアお達者で何より……お知らせに預つてもお出迎ひにもよう出ずに居りまして……しづが何うも何んなもんですから……』

ねち〳〵した名古屋辯で慇々と喋るお袋の挨拶を持て餘した岡本は、

『えゝお蔭で……否なに何う致しまして、は……』

杜切れ〳〵の返辭しながら、早くおしづが出て來れば宜いにと思つた。

『おしづ〳〵、歸つて見えたぞな、おしづ』

お袋が呼ぶと奥からおしづはふら〳〵と出て來た。亂れ切つた銀杏返し、青石い痩れた顔、凄い眼の光り、岡本はゾッとしたが、それでも懷しさに變りはない、

『おゝ、おしづ』

と呼んでみた。じつと岡本の顔を見てゐたおしづは、

『あなた誰あれ？なに？違ふ〳〵主人じやないわよ、私は敷島は忌や、朝日が好き、ほゝゝゝ』

と言つたきり、すつと奥の間へ入いつてしまつた。息のつまつたやうな感じに打たれて、その變り方の餘りに淺間しいのに呆れてゐた彼は、

『お母さん之りや何うしたと云ふのです』

と言ひながら椽にどつかと腰を卸して、

『あゝ〳〵情ない姿になつたものだ』

と呟いた。

◆モウ癒るまいね

——岡本は俄に冷酷になつて遂におしづを捨てた——

おしづに會ふのを西伯利亞から樂しんで來た岡本は、おしづの狂はしい變り果てた姿を見て千仞の落に陷つたほど落膽した。それから細々とお袋の話を聞いた。病氣の經過から、現在の言動、行者の話と順に聽いてゐるうちに彼の顔には冷い平靜の色が浮んで來て。而して最後に、

『うーむ、それじやアもう癒る見込はありませんな』

と冷かな語調で言つた。

死靈の話に就ては、

『そんな馬鹿な、否私には何の心當りも無い』

と答へたきりで多く言ふを欲しないやうであつたが、氣のせいか其の時彼の顏には或る一種の惱しい表情が浮んだ。そのうち岡本は思ひ出したやうに時計を見て、

『おモウ四時だ、おしづがあれじや仕樣が無いから私は之から鄕里へ一寸歸つて又出直します、大切にして遣つて下さい

と言つて、兵隊さんらしいお辭儀をしてあたふたと歩み足して、

『まあソウ云はずに今夜は宿つて……コレおしづ……兎に角上るだけなりと上つて……おしづコレ』

お袋が慌てゝ同じやうな事を言つてゐる間に岡本はモウ四辻を右へ曲げてしまつた。

× × × × × × ×

二三日過ぎてから、

『大金を投じて落籍したおしづではあるが、あの病氣では私が商賣を始める譯にも行かぬから離緣する故左樣御承知を』

と云ふ意味の手紙が岡本から來た。

何んと云ふ水臭い仕打であらうとのしづのお袋は泣いた。近所の人達も男の冷酷を聞いて憤慨した。

憐れな狂女おしづと其の母とは最早や天上天下頼る處は無くなつたのである。併し之が爲めにお袋の菩提心は俄に強められ、何うしても娘の病氣を癒してみせ度いと云ふ固い決心が築かれた。

◈死靈の主は之だ

――岡本は大連で病妻を捨てた。今では機成金。おしづはモト藝妓――

此處で岡本とおしづの素性を概略述べて置く。

岡本は岐阜縣武儀郡××町の相當の資産家の二男に生れた。小學校を卒業すると美濃笠松の或る縞問屋へ奉公し、兵役が終ると笠松で獨立して機屋を始めた。けれども其れは失敗に終つた。泣面に蜂の諺の如く、

彼は失敗する少し前に、父を失つた。處が相續した兄が又頗る付の慾張りと來てゐたので融通をつけて貰ふ譯にも行かず、爲に遂に再度の旗を上げる事ができなかつた。それから、その中誰かに勸められて、妻子を連れて大連へ渡つた。けれども此處でも巧く行かないので、再び内地へ戻つて、モトの笠松で織物の鞘取りをしてゐた。而して今度は此の口錢取りで儲けた少しばかりの金を資本に、小さい乍ら機屋を始めた。處ぺ歐洲の大戰が始まつた。機業界は俄に活氣づいた、彼もトン〳〵拍手に儲けて、所謂機成金として時には相當の豪奢を見せ得るやうになつた。

「縞の相場は料理屋で決まる」と此の邊では云はれてゐる位で、縞の取引は大抵は料理屋で飲みながら行はれる習慣になつてゐる。で、岡本も問屋の番頭が買出しに來ると、何時も其れを岐阜の金津廓へ連れて行つ

て其處で話しをつける事にしてゐた。彼の遊ぶ先は「みやこ」と云ふ揚屋で、呼ぶ藝者も大抵決まつてゐた。其の藝者の中に若千代と云つて、藝は餘り達者ではないが、心の優しい落着いた、若い、面して美しい妓がゐた。藝妓を女房にする事が流行で而も誇かのやうに彼等機屋仲間ではせられてゐるので、負けぬ氣の岡本は小成金になつて威力を見せびらかす爲と、女房が無くては何かと不便なので、遂に若千代を落籍して家へ入れた。虚榮と實用とを兼帶させたのであつた。その藝妓が今狂ひ廻つてゐるおしづなのである。

× × × × × × × ×

おしづを離緣すると云つて來た手紙に依つて、男の薄情を恨み出した

おしづのお袋は、誰彼なしに彼の惡口を喋つて歩いてゐた。而して一人の岡本の同郷人から恐ろしい彼の罪を聞込んで來た。

それは彼が滿洲へ渡る時に連れて行つた女房を、彼地で置去りにして歸つて來てゐる事であつた。――大連で岡本は非常に窮地に陷り食ふにも困つてゐた。處へ女房が疾み付いたが、それが又結核性のものであつたので何時まで經つても癒らない、醫藥の料は無し、癒る見込はなし、進退谷つた彼は、殘酷にも病妻を置去りにして、夜逃げ同樣に内地へ引揭げて來た。何んでもアトで女房は恨み死に間もなく死んだらしい噂である、と云ふのである。

『癒る見込が無いから捨てる……何と云ふ情知らずの奴でしやう……おしづも此の手に掛つたのだ』

聞き込んだ事を行者に全部話したおしづのお袋は最後にコウつけ加へた。

『あ、判つた死靈の女は其れだ！』

漸く合點したと云ふ顔付で、行者は喜んだ。

◈彈く常盤津

——二十一日目におしづは全快して、富澤町から君奴と名乘つて出た——

お袋の菩提心は固つなつて、死靈の主も判つて來た。おじづの病勢は追々平靜に入りかけた。一週間ばかり前には、施餓鬼の爲に呼んだ旦那寺の坊さんさへ、おしづの氣味の惡い擧動に讀經半で逃げ出し、翌日

賴みに行つても、

『もう〳〵眞平だ、何うぞ他寺で……』

と云つて來て呉れなかつた位だ。それが近頃は、お湯へ行きたがつたり髮の亂れや着物の垢を苦にするやうになつた。話も大分分るやうになつた。只だ、小さい聲で獨語のやうに、

『忌やア恐いもの、笑やあすで、まあ行くわ』

などゝ何とも判らぬ言を繰返しながら戸外へぶら〳〵と出歩き出すので、まだ癒つてゐないなと他人が思ふ位の事である。

「おしづが眞人間に近寄つて來た！」と云ふことはお袋の心に強い緊張を與へた。お袋は懸命になつて神佛の信心を始つた。眞夜中に起きてお百度も踏むやうになつた。

お供物の菓子を施すことも一層盛んに遣り出した。行者に掛つた三七二十一日目にはおしづは三味線を持ち出した。而して、

「既に今樣始りと、告ぐるや春の興そへて、其のして方は名にし負ふ虎少將がふり事に、色じやなけれど小林が、手くだの罠に釣狐……

と云ふ處から常盤津の「釣狐」を彈き出したが、少しもお可笑しい處や變つた擧動は無かつた。

『お、おしづが癒つた！』

お袋は氣も狂はんばかりに喜んだ。行者や近所の人々を呼んで來て、お袋は涙を浮べて禮を言つた。

『皆樣お揃ひで一體何あんです』

おしづは只だコウ言つて呆れてゐるばかり、今までも自分の病氣は更

に知らぬものゝやうであつた。

其の夜おしづの家では全快の内祝を遣つた。湯上りに薄化粧したおしづの顏はくつきりと電燈の光に榮えて、嬌艶な其の美しさは誰の眼にも之が今まで病人であつた女かと怪しまれた。おしづは三味線を彈いたり唄を歌つたり、燥ぎゝつて、如何にも藝妓らしく酒間を斡旋した。絶えずおしづの擧動に注意してゐるお袋の眼には嬉し涙が一ぱい宿つてゐたおしづの一家は明るい空氣で滿された。

× × × × × ×

それから二十日ばかり經つてからであつた、名古屋の富澤町の〇〇家

から君奴と云ふ一寸年の行つた美しい新妓が現はれた。

それはおしづであつた。（をはり）

お繁〳〵

◆月光を浴びつゝ

——おしげ〳〵と叫び歩いてゐた
狂人が東陽町で首を縊つた——

名右屋の新堀川の堀止めから東陽町の交番へかけての廣つ塲に澤山の人が群つて口々に何やら噂をし合つて居る。交番から少し西へ行つた處にも人の輪が作られて居つて、その中で巡査や警察醫が一つの死骸を弄つてゐる。群つて居る人々の口々に喋る處を聞くと、何んでも死人は狂人で、

『おしげ、おしげ、おゝおしげが來た。おゝおしげが、ひゝゝゝ。なに

畜生！畜生！〳〵己れ糞！』

などゝ口走りながら、昨夜、皎々たる月の光を浴びながら此の邊を徘徊つき廻つてゐた。それが昨夜の中に東陽館の前の材木置場で縊死して居たので今警察から檢視に來てゐるのだと云ふ事である。死人は髪も蓬々で、餓鬼のやうに痩せ痩れてゐる。處々鍵裂になつた汚れ切つた着物垢だらけの足や手、底光りのする――細く開いてゐるだけではあるが――何者かを恨んでゐるやうな其の眼、二目とは見られぬ慘な凄い死體である。

翌日の新聞には、何處の者とも判らぬので市役所へ引渡されたが、おしげ〳〵と口走つてゐたと云ふから女に關係ある何かのロマンスを持つてゐたのであらうと云ふ意味の事が、何の新聞にも載つてゐた。

覺えがあります

――水一杯も咽を通らぬ病氣。
彼女は縊死狂人の女房であつた――

大正七年冬の或期、五十二三の婆さんが、よぼ〳〵と杖に縋つて鯉江行者の許へ來た。而して苦しさうに、息を切らせ勝ちに物語る處を聞くと、此の女は中區西瓦町一の切の樋上しげと云ふ者で、十日ばかり前に流行性感冒に罹つた、處が何うしたものか、食事は素より藥も受けつけない、強いて飲み込まうとすれば直ぐ吐く、水一口も咽を通らない、東陽町五丁目の遠藤登一と云ふ醫者に罹つて居るが、藥を受け付けなくては癒しやうが無いと持て餘してゐる、食はず食まずの十日間、頭は痛く

なる目は眩む、もう〳〵半分は死んだやうな心持だ、隣の人に聞いたので先生にお縋りに來た、何うぞお助けが願ひ度いとの事であつた。而して話し終ると死人のやうにぐつたりとなつて其處へ倒れた。

そこで行者は、例の感應に依つて病源を照してみた。すると之は死靈の祟りであることが判つた。

死靈と聞いた刹那、婆さんはむく〳〵と起き上つて、

『死靈！……あります〳〵ちやんと覺えが……あゝ無理もありません私は若い時に殘忍らしい事がしてあります』

と、感慨無量の面持で、其の老の眼に涙を一ぱい宿らせた。

二十年も前に、おしげ〳〵と呼びつゝ狂ひ死に東陽町の材木置場で縊死した男は實に此の婆さんの亭主であつた事が、彼の身の上話で判つた。

◈亭主が子守役

——十八の年に駈落して來た。
おしげの稼ぎ高は亭主よりも多かつた——

此の婆さん——樋上しげ——は、青物の集散地として名高い琵琶島の近くの生れで、十八の時に、相愛の男と手を取つて名古屋へ駈落して來た。而して亭主は日傭稼ぎに、自分は機織に出て其の日の生活を立てゝゐた。その内に女の子——今年十九になる——ができたので、機織の方を休まねばならぬやうになつたが、力仕事に掛けて一向間に合はぬしげの亭主は、毎日貰つて來る賃錢も、極めて少ないもので、細いなりにも

煙を立て、行くことが容易でなかつた。その頃から戀の甘味は全く薄らいで、晝となく夜となく一寸した事で夫婦喧嘩をするやうになつた。

『ど意氣地無しゞやなア お前さんは、子供の守してゐらつせ、私が儲けて來て食はせて上げますに』

赤ん坊が漸く御飯を食ふやうになると、おしげは斯う云つて、子供を亭主に打ちつけて置いて、又モトの工場へ機織りに出掛けるやうになつた、機械は日傭稼ぎと違つて雨が降つても働けるのと、おしげは村にゐる頃から機に掛けては人に負けない腕を持つてゐたので、此處でも腕つこきとして數へられてゐる位だのと、他の工女のやうに夜業を休まないで精出すのとで、其の收入は、自分の亭主の稼いで來る日傭賃より遙に多かつた。

勘定日に、おしげの取り高の多いのを見て、

『おしげさんは毎月殘るであらう』

などゝ羨しさうに問ふ朋輩もあつた。そんな時は何時も、

『何が殘るどころか……良人に意氣地があつたら私がこんだけ持つて入るし、少しは樂もできやうに……あゝ樂しみのない事だ』

などゝ愚痴してゐた。

◆おしげの愚痴

――氣晴しに萬歳芝居を見に行くと其處に池田さんが居つた――

大きな男に子守位をさせて置いて、女の自分が稼いで一家の生計を立

て行かねばならぬと云ふことが、おしげには馬鹿〳〵しくて堪らなかつた。

『自分の家へ夜遊びに來る村の若い衆の中で、良人が一番男振が好かつたので、つい駈落までしたものゝ、斯んな事ならアンナ優男に惚れないで、我慢強いので評判であつた金太にでも惚れて置けば宜かつた』

などゝ、心の中で今更取り返しのつかない愚痴をコボしてみる事もあつた。蟀蟋の悲しさうに泣く或夜の事、おしげは、

『此頃うち何だか氣が滅入つて仕方が無いから一寸萬歳芝居を見て來るから』

と亭主に斷つて置いて、東陽町の富貴座へ行つた。

萬歳が濟んで、次の幕は茶番の忠臣藏四段目であつた。間の抜けた面に作られた判官が大きな出刀を待つて腹を切りかけ、下らぬ冗口をべちや〳〵と喋つてゐる。その顔が何處となく自分の亭主に似てゐるのが彼女には堪らなく厭やであつた。

『あゝチットも面白くない、もう歸ろ、五錢の木戸錢じや其の筈か』

と呟きながら、おしげが立ち上らうとすると、

『おい！おしげさん』

と一人の男が肩を叩いた。

『あれ池田さんか』

おしげはふり返つて、さも驚いたらしくコウ叫んだ。

池田さんと呼ばれた男は染色の職工で、おしげの通ふ工場の雇人であつた。

◆萬歲芝居の歸り

——池田さんは意味ありげに……。

おしげも『濟まんなも』と笑つた——

幕合になると池田さんは、鰯だの菓子だのを買つて來てはおしげに呉れた。おしげも返禮の意味で柿を買つて來て池田さんに遣つたりした。池田さんが自分や隣りの人と話す話し振りや、舞臺に向つて時々半疊を入れる其の野次り方などが、如何にも氣が利いてゐた、機敏で、而して何處となく男らしいやうにおしげには思はれた。

芝居が終ると池田さんはおしげに下足を取つて來て呉れた。二人が表へ出ると、乾き切つた肌にこたへるやうな冷たい秋の風が西から東へ可

成な速力で吹いてゐた。

『おゝ寒む、羽織を着て來や宜かつた』

と獨語を言つてから、

『おしげさん、すき燒でも食つて行かう、私が奢るは……斯んなに寒むくてはやり切れん』

池田はおしげに向つて言つた。

『有り難う、でもマア止いて頂戴、誰か見てゐらやヤすと困るでなも』

羞しさうな動作をしながらおしげは生娘のやうに優しい聲で答えた。

『誰か見ちよるもんか、又見とつたとて私が奢つて一處にすき燒を食つた位の事が何んだ、宜いからお出よと云ふに……』

無理におしげを引立てるやうにして寺町筋の少し手前の北側の洋食屋

の二階へ上つた。

工場の大將の癖やらお神さんの氣質やら男女工の噂やらを面白く話しながら飲んでゐた池田は、酒が廻るに從つて、

『自分も何時までも一人ではゐられぬ』

とか、

『何處かに善い嫁が一人無いか』

とか色々な事を言つて居つたが、その中に、

『自慢じやないが、私も相當の腕を持つてゐるつもりだから、實は何時も若しおしげさんのやうな確り者が私の嫁になつて呉れたら隨分面白く稼げやうと思ふ事だがね……』

言ひ憎さうにして斯う言つてちらとおしげの顔を見た。氣のせいか池田の息はハヅんでゐるやうに思はれた。其の眼には、醉つてはゐるが眞剣の光が輝いてゐるやうに見られた。

『此頃中氣がくさ〳〵して仕樣が無いから、何うせ奢つて貰ふ位なら私も飲むわ』

などゝ戯談を言ひながら先刻から六七杯盃を重ねて、顔をぽーつと赤くして來たおしげは、憎らしいと云つたやうな目つきで池田の顔をじつとみて、

『おや〳〵有り難う濟まあんなも』

と一口言つたが、すぐ温和な表情に戻つて、

『ほゝゝゝ』

と笑つた。

其の夜おしげが家へ歸つたのは二時頃であつた。

× × × × × × ×

おしげは今迄餘り芝居は好きでなかたが、其の頃から時々芝居を見て來ると云つては家を出るやうになつた。

◆亭主を置去りに

――安七は其の夜から氣が狂つて『おしげ〳〵』と喚き廻つた――

おしげの亭主の安七は一月ばかり前から心臟を疾んでぶら〳〵として居た。さらぬだに女房の前では頭の上らぬ安七は、病氣以來と云ふもの

は食物も碌々與へられず、口の所作に、あらゆる虐待をおしげから受けた。近所の人々もおしげの仕打の近頃あまりに殘忍になつた事を憎んで安七に同情してゐた。隣のお種がこつそり安七に持つて行つて遣つた五目飯の器が、おしげに見付つて安七が、こづき廻はされた翌日の事であつた。安七は御器所の何んとか地藏は靈顯あらたかだと云ふ事を聞いて病氣平癒を祈りに行つた。痩せ衰へた體を杖に賴つてソロ〳〵と行くのであるから、自宅へ歸つた時はもう電燈が燈いてゐた。

『おしげ、行つて來たぞえ』

力の無い聲で、戸口を跨いで、

『あゝあゝ草臥れた』

と上り框へ腰をどつかと卸した。が、おしげの返辭もなければ、娘のお

米の聲もせぬので、

『おしげ、おしげ、お米も居らんか』

と言ひながら障子を明けた刹那、

『あッ！』

と驚いて土間へ倒れた、而して、

『おゝおしげ！おしげーいッ』

と喚いた。

安七が驚いたのも無理ではない、彼の家は此時もう家財道具一つもない空家になつてゐた。

其の夜から安七は『おしげ〳〵』と喚きつゝ狂ひ廻はるやうになつた。

『借家が見付かつて、亭主は先へ行つて待つてりやすでなも』

と言つて、先刻おしげが引越車に荷を積んで行つたのは安七を置去りにする爲であつたことが此の時近所の人々に合點された。安七が東陽町で縊死したのは其れから一週間ばかり後の事であつた。

◆おしげの懺悔

——誠心こめた一週間の供養で難病は遂に平癒した——

夫を捨てゝ行衛を闇ましたおしげは幡下の或る町で池田と所帶を持つたのであつた。而して勤先こそ二人とも幾つも轉々したものゝ兎に角腕

達者な二人の事として暮しに困るやうな事は一度もなくて二三年を過した處が現在の西瓦町一の切へ移つて間も無く、亭主の池田が風邪をひいた最初の中は一寸した事と思つてゐたのに、其れが追々と重くなつて、終ひには藥も食事も牛乳さへも受け付けないやうになつた。無論醫師は云ふに及ばず方角、家相の呪など迷信家の仕さうな方法は、あらゆる事を行つてみたが、更に効果は無かつた、六日六夜、食はず飲まず苦しみに苦しんで遂に悶え死に死んでしまつた。

今度のおしげの流行性感冒が藥も食事も一切受けつけないのは、死んだ亭主の時と其の經過が少しも違はない、悶き死んだ亭主の、臨終の時の恐ろしい形相と、身の毛も慄つやうな唸き聲とが目の底、耳の底から未だ去らないおしげに取つて自分の玆二三日の容態が、如何に氣味惡く

惡ろしい事に思はれたのであらう。

『全く生きた心地はありません』

と、餓鬼道に陷つた者が地藏の袖に縋りつくやうに行者に縋つて來たのも、罪業の致す處とは云へ亦一面氣の毒な者と云はねばならぬ。

× × × × × × ×

身の上話を聞き終つた行者は、佛者の道を懇々と說いて、

『お前等夫婦の病氣は、全くお前等の心掛が惡いからだ、先夫安七を食はせもせず虐め殺して、その上供養もせぬので其の靈が祟つたので、其の因果に依つてお前等は水一杯も咽を通らぬやうな、今日の醫術で判らぬ程の難病に罹ると云ふ應報を得たのだ』

との結論を與へた。おしげは懺悔の涙をはら〳〵と落して其れを聞いてゐた。

それからおしげの誠心こめた一週間の位養に依つて、流石のおしげの難病も忘れたやうに癒つた。

高い山から谷底見れば
瓜や茄子の花ざかり、チヤンコラ〳〵

おしげは今でも元氣よく斯んな歌を唄ひつゝ機を織つてゐる。が、食事を終つた時や、夜床へ入つて寢つくまでは、いつでもお念佛を唱へるやうになつた。（をはり）

綿屋の娘

◆綿屋の娘お光

——商賣上手で美男の鐵次郎は二十四にして始めて戀を知つた——

東濃中津の町端れに湯淺鐵次郎と云ふ青年があつた。家は半商半農であるが、親は、兄弟のうちで彼が一番小才が利いてゐると云ふので彼の十四五歳の頃から彼を商用の方面にばかり使つてゐた。彼の商賣と云ふのは農家へ廻つて行つては米を買出して來る事であつた。二十前後になると、彼の商談の機敏なことや、懸引交渉の上手なこと、算盤に達者なことなどが近所界隈での大人仲間の評判になつた。又彼の顏のきりゝと

引締つてゐて縞の着物に角帶をきちんと結び其の上へスコッの前垂を締め「さし」を持つて歩いてゐる、其の姿の何となく粹なことが近所界隈での娘仲間の評判になつた。だから少し早成たお針子などは時々彼の噂を語り合ふやうな事もあつた。けれども彼は商賣にこそ熱心であるが、決して町の娘達に目を呉れるやうな事は無かつた。一心不亂、商賣に專念して數年は過ざたが、それでも町の娘達には騷がれる、一方に於ては父の名代として米屋仲間の色々の交渉にも顔を出すと云ふやうな事で、二十四歳になつてからは流石の彼の體には青春の血が燃えるやうになつたが、それとて夜遊びをするのでも無ければ藝娼妓狂ひをすることも決して無い。

× × × × ×

或日の事であつた。彼が米の買出しに隣村へ出掛けると途中で一人の美しい娘に逢つた。娘は手に持つてゐる水仙と高龍を下に向け一寸道を避けるやうな態度をしながら、

『お早うございます』

と優しい聲でお辭儀をした、

『へい』

彼は商人風の輕い會釋をして摺れ違つた。が、其の刹那に、生れてから嘗て經驗した事の無い或る一種の惱ましいやうな壓迫と一種の刺戟とを彼は覺えた。而して全身の血が一時に頭の方へ集中するやうにも感じた。彼の女のくつきりとした眉、豐艶な容貌、涼しい眼、筋の通つた鼻それらがチラと見た瞬間に彼の腦裡へ深い印象を與へた。

『何と云ふ美しい娘であらう』

と獨り囁いて、無意識にフト振り返つた。娘も此方を振返つて見てゐたが、彼の視線を浴びて、惡い處を見付けられたと云ふやうな表情で羞んだ微笑を見せ、直ぐ歩み出した。氣のせいか其の刹那彼の女の顏は少し赧んだやうでもあつた。

彼の女は鐵次郎の家から三四丁上の綿屋の娘で、名はお光年は十八。毎日隣村の庵寺へ活花の稽古に行くのであつた。

彼は毎日のやうにお光に逢つた。而して終にはお光の往來する時間を言計らつて外出するやうになつた。お光も鐵次郎に逢はない日は何んだか物足りないやうな氣がするのであつた。

× × × ×

お光と鐵次郎との駈落が町の評判になつたのはソレから二月ばかり過ぎての事であつた。而して町の人々は、

『綿屋は昔からの金持、鐵さんは成り上り、迚も夫婦にやなれぬと云ふ處から駈落したのであらうが、似合ひの二人だ、夫婦にして遣つたら宜かつたらうにナア』

などゝ批判し寧ろ二人の行爲に同情を寄せてゐるやうであつた。

◈鐵次郎の放蕩

――二人は東京へ落ち延び
鐵次郎は米相場で失敗を招いた――

中津を落ち延びたお光と鐵次郎は、それでも途中追手にも捕はれず東

京へ入り込んで京橋本八丁堀の裏長屋の一戸を借りて世帶を持つた。半月ばかりは追手を恐れて外へも出なかつたが、もう其の心配も無さそうなので、チヨイ〳〵二人連れで見物にも出るやうになつた。それと同時に鐵次郎は蠣殼町へ通つて米相場に手を出し始めた。米相場ならば彼には今までの商賣柄多少呼吸が判つてゐるからである。而して其の元手は鐵次郎が掻浚つて來た親父の金と、お光が簞笥から盜み出して來た金とで、合せて八百圓見當あつた。二人の身の上には甘い月日が續いた、小膽な相場な遣り方だけに鐵次郎の損益も初めの中は大したものでは無かつた。

夢のやうに二年は過ぎた。其の頃から銀次郎はチヨイ〳〵大きな相場を試みるやうになつた、時には顏色を失ふやうな事もあつた、が、そん

な時はお光は常にも增して彼を能く慰め力をつけなどした。又彼は近頃所謂相場師氣質に染れて、時々、豪遊もすれば葭町、濱町方面で泊つて來るやうな事もあつた。けれどもお光は何處までも貞淑で、家を明けたからとて忌やな顏一つ見せた事は無かつた。鐵次郎は、初めの間は、濱町の待合で泊つて來ても尙ほ且つ飽くまで柔順なお光を見ては良心に耻ぢずにはゐられなかつた。又お光が近來滅切り世話女房化して來て、紺足袋、襷掛けでせつせと立働くのに對して心から感謝の言葉も掛けるのであつた。

『綿屋のお孃さんに生れながら……』

と同情の涙さへ催すのであつた。けれども其れは一年ばかりの間で、もう此の頃は、お光の柔順貞淑も、又彼女の勤勉努力も、慣れッこにな

つて終つた、左程嬉しいとも有り難いとも思はぬとも一向感しないやうになつた。而して益々身を放埒に持ち崩すやうになつた。が、それでもお光の彼に對する態度は少しも異る處は無かつた。

× × × × × × ×

東京へ來てから三年目の事であつた、それでなくてさへ飲み尻が各處に嵩まつてゐる處へ、彼は相場に大袈裟な手の出し方をして失敗した。何を云ふても東京へ出て間も無い新米の事とて融通の附け樣のあらう筈はなし、有り金は悉く持ち出したが未だ足りない、二進も三進も取れない、進退は谷まつた。それでもお光は忌や味一口も言はないで夫に仕へた、二日ばかりの間鐵次郎は腕拱いて吐息を洩しつゝ思案に暮れたが

何うしても名案は浮ばない。そこで一夜お光とも相談の上、郷里中津へ立ち歸つて何とか金策の道を講じてみやうと云ふ事になつた。百計盡きての事であるから、已むを得ず賛成はしたものゝ、綿屋へ知れて自分が引戻されはせぬか、鐵次郎の父が腹立つて鐵次郎を再び東京へ出さないやうにするのではあるまいか……と云ふやうな事がお光には心配でならなかつた。而して之か生き別れとなるのではあるまいかと思ふと彼の女は遣る瀬無く悲しかつた。

『ね、お金は出來なくてもキツト歸つて頂戴ね』

泣き口説くやうにお光は其の夜斯んな言葉を何度繰り返したか知れなかつた。

◆私は捨てられた

――鐵次郎からは幾月經つても便りが無かつた。お光の理智は漸く目覺て來た――

金策の爲に故郷に歸つた鐵次郎は名古屋から一枚の葉書……――只だ名古屋へ着いたと云ふ――寄越したゞけで、幾日經つても何の便りも無かつた。飽くまで夫を信じてゐるお光は蔭膳などを供へて、其の無事を祈つた。

『故郷へ錦を飾ると云ふのに、夫は失敗して借金に行くのだ、嘸口惜しからう辛からう』

などゝ夫の身の上に同情し、夜の明ける頃まで泣いた事は幾夜もあつ

た。一月、二月、三月、然も何の音づれは無かつた。斯うなると如何に夫を信じてゐるとは云へお光にも疑は起さずにゐられなかつた。何處にゐるのか判らぬのに手紙の出しやうも無し。夫が出掛ける時之が此の世の別れになりはせぬかと云たことがフト胸に浮んだが、其れが或は實際になつて現はれて來るのではあるまいか。斯う思ふと彼の女は矢も楯も堪らなくなつて、只だ止め度も無く熱い涙が兩頰へ流れるのであつたが、それよりも尙ほ急を要する、足下へ火の付いた問題として彼の女には生活難と云ふ一大災厄が迫つて來てゐた。鐵次郎が立つて後、最初のうちは、彼の女の心掛に依つて萬一に備ふべく貯へられてゐた二十圓の金があつたが、其れが無くなると今度は夫の着替や自分の着物などを片ッ端から賣り拂つて、何うにか三ケ月は持ち堪へて來た。が、もう今と

なつては屋内見渡す處何物も無い、自分も着のみ着の儘となつた。夫を戀する情を離れて、明日から何うして食事を得やうと云ふ事に思ひを廻らすとお光はもく〳〵泣くより外に途は無かつた。

『私が食べるに困つてゐることは判つてゐる筈ではないか』

と云ふ點に氣が付くと、彼の女の理智は俄に目覺めて來た。

『そうだ、あの人の最近の樣子では、あの人の心は或は私からもう離れてゐたかも知れぬ』

お光は稍深く立ち入つて考へ出した。

『してみると或は私は遂に捨てられたのではあるまいか』

斯う推論を進めて行くと、最近の擧動、三月からも便りの無いことなどが悉く其の推論を有力にする材料であつた。

『あッ私は見捨てられたのだ！』

地獄のドン底へでも落ちたやうにお光は狂はし氣に叫んだ。

『えゝッ口惜しい私は今まで欺されてゐたのだ』

と、聲をあげて泣き伏した彼の女の顏面筋肉は、腹立たしさに震えてゐた。

◈敗慘の我が姿よ

——無一文のお光は名古屋から岐阜まで歩くより外は無かつた——

永い間の理智の眠から覺めたお光は、もう昔のやうな柔順な貞淑、而して謙讓な勤勉な女房では決して無かつた。夫を恨み、夫を呪ふ女にな

つてゐた。心には嗔慧の炎を燃やしてゐた。

彼の女は早速古道具屋を連れて來て勝手道具一切を賣拂つて、之を旅費にして郷里へ歸る事とした。

× × × ×

× × ×

道具屋に引渡してゐる時に一枚の葉書が來た、それは鐵次郎が岐阜の御殿町にゐると云ふ事を記したもので、差出人の名は無かつた、夫の手でも無かつた。が、彼の女には今更そんなものは何の嬉しさも懷しさも與へなかつた。自暴自棄に陷つてゐるお光は隣家への挨拶もしないで新橋驛へ駈け付けた。けれども彼の女の持金は漸く名古屋までの汽車賃しか無かつた。富士山を見ても箱根を通つても、彼の女には、もう樂しかつ

た往きの事を思ひ出して泣く涙さへも無かつた、それほど彼の女の心は荒んでゐた。

東京を遲く立つたので名古屋へ着いたのは午前の三時であつた。汽車賃の外一文も持たない彼の女は、此の眞夜中に着いては何うする事もできないので、岐阜まで七里の間を歩いて行く事とした。秋の夜明けの風は身を切るやうに寒かつた。琵琶島を通り、幾つかの村と畷を經て一宮へ出て其れから木曾川橋を渡つて行かねばならぬ、豐橋で東市から持つて來た握飯を平げてしまつたので今はもう空腹を覺えた。腹は空る、寒さは身に答へる。生れてから二里と歩いた事の無いお光は、身體が煉れる程勞れてゐた。けれども岐阜へ行つて、鐵次郎をこつぴどく苦しめて遣らうと云ふ大目的のあることに勵まされて、痛んだ足を引摺りながら

歩いた。一宮を越した頃明けの鐘が何處からか響いて來る、物淋しい秋の夜明け、色々な過去の追憶が、暴風の前に去來する浮雲のやうに彼の女の頭を掠めて行く、垢染みた白飛の木綿の着物に、小倉の一重帶、亂れた髪、薄く履き減らされた駒下駄、自分の敗慘の傷ましい其の姿が自分に氣がついた時、彼の女の眼からは涙が止め度なく零れた。

『之が中津の綿屋の娘のなれの果てか』

お光は聲を震はせて悲しんだ、其の刹那の中津の兩親の事が思ひ出されて悲しさは一層加はつていつた。笠松の橋を渡るとき、此處から木曾川へ身を投げて死なうかと、幾度惑つたか知れない。

◆憐なる蜻蛉の姿

——目覺めたるお光の理智は、彼の女に斯う囁いた——

岐阜の街へ入つたのは朝の九時頃であつた。冷酷な鐵太郎を苦しめて遣るのはもう三十分か一時間の後であると思ふと空腹い思ひも、足の勞れも忘れて俄に足の運びが力づいたやうであつた。街の甕を離れた秋の太陽の光が、相當の强い熱度を脊中に浴びせて呉れ出した事がお光には蘇生つたほど嬉しいものゝ一つであつた。零落た果てた自分の姿を氣にしながら御殿筋を軒並に片つ端から根氣よく覗いて歩いた。靜かな、濕氣の未だ乾かない街路の上に一疋の大きな蜻蛉が翅を露に濡らしながら

體を震はせて止まつてゐた、人に踏まれさうになつても飛ぶ勢は無かつた。

『可愛さうに！自分の今の境遇は恰度此の蛤蜊のやうなものだ』

慘めな自分の姿と蜻蛉の憐れな姿とを比べて斯うも考へた。人にも尋ねて見たり自分にも熱心に探したが何うしても鐵次郎の家が見當らない

『若し愈々見當らぬとなつたら何うしたものであらう、自分はもう野垂死の外はあるまい』

と考へかゝると、緊張した彼の女の氣分は半落膽の方へ移らうとして來た。眼には俄に熱い涙が泌んだ。道にうつ伏して思ひ切り泣いてみたいやうな感傷的な氣持にもなつた。が、兎に角何處かで一休みしやうと、魂の拔けた人間のやうに歩むともなくフラ〳〵と角を曲つた。すると

角から三軒目の格子造りの小さな併し小奇麗な家に――戸口に「湯淺鐵次郎」と記した新しい標札が目に止まつた。

『あッ此處だ！』

全身の血がさつと動いた、涙が一時に流れ出してもうお光には何を考へる餘地も無なかつた。

けれども其れは家を見付けた瞬間で、少し心が落着いて來ると彼の女の目覺めたる理智は、

『慌てゝは不可ない、此の内には罠がある』

と彼の女に囁いた。

『それだ、夫の愛はもう自分から離れてゐる。而して斯うして一戸を構えてゐる以上屹度女が出來たに違ひない。口の甘い小才の利いた彼の口

と才は東京で、一層磨きが掛けられた。其の口と才で、まんまと此處に居付いたのであらう。そんな男に、そんな男に未練を掛けて其れが何にならう、冷酷なる者には冷酷に酬ゆるより外は無い。よし、もう夫婦になる事は諦めやう、自分は只た、彼を苦しめれば其れで善い』

お光は表に立つて長い間思案の上、斯う決心した。

『御免なさい』

お光は戸口を開けて漸く入つた。而して何うか最初出て來る顔が、夫で無いやうにと心の中で祈つた、それは若し最初鐵次郎が出て來て彼の魅力のある視線を自分に向けたら或は自分の決心が鈍りはすまいかと云ふ懸念があつたからである。何と云つてもお光の心の底の中には未だ鐵

次郎に對する未練があつて、それと理智との闘爭に東京から今此處へ來るまで彼の女は少なからず苦しみ悶えたからである。けれども現はれたのは幸に女であつた。

『豫想通りもう女が出來てゐるんだ』

お光は豫期した事とは云へ現在其れを目の前に見ては、忌まゝしさに總身の震えるのを覺えた。新嫁らしう丸髷に結つた、痩せ型の其の女も、障子を明けると同時に、身裝は惡いが併し何となく上品な、痩れてはゐるが、凄い程の美しいお光が立つてゐるのを見つけて、驚いて顔を一寸引込めた。が、

『お出やす』

とさあらぬ體を裝つてお辭儀した。

『湯淺の宅ですね、鐵次郎は居りますか』
少し震ひを帶びた聲でお光は尋ねた。
『何方様です、貴女は』
女の聲は尖つてゐた。
『さう言ふ貴女は何方です、私は東京から來たんですよッ』
女の顏には淡い嫉妬の影の閃くのが明にお光には見受けられた。が
女は平氣を裝つて、
『へえい、東京から……まあお可笑な人、私は湯淺の家内ですが、湯淺
が何うかしましたか』
『嘘仰しやい、湯淺の家内は私ですよッ』
『あれッ此の人は狂人だ』

『何んですッて狂人ッ』
お光はモウ我慢ができなかつた、齒を食ひばり、險はしい目を一層光
らせて、
『口惜しいッ』
と叫びながら野猪のやうに飛びついて女の丸髷を力限り握つた、
『あれッ人殺しいッ』
女は恐怖に脅えた甲高い聲を張り上げた。
『あッ痛何うするの』
『痛たゝゝゝ口惜しいッ』
二人の喚く聲が、矢を放つやうに續けられる、二人は土間で上になり
下になり攫み合ひを始めた。嫉妬の炎は兩方に命懸けの力量を出させた

處へ隣りの男が、その物音に驚いて飛んで來た、

『何んだ〳〵、お島さん何うしたのだ』

『あゝ苦しい、綿屋さん、助けて頂戴』

お島と呼ばれた其の女は組み敷かれたゐて斯う叫んだ。

『まあ〳〵待つた〳〵』

隣の親爺は二人を力任せに引分けた。と同時にお光の顏を見て、

『おッお前さんは綿屋の光樣』

『あッ善吉か、口惜しいッ』

お光は土間へ泣き伏してしまつた。

× × × × × × ×

鐵次郎は不在で其の活劇の中へは一切顏を出さなかつた。善七はお光の家出する一二年前までお光の家で綿打ちをしてゐた男で、其の後岐阜へ來て自分で綿打をしながら小さな綿店を出したのであつた。お光を自分の家へ連れ歸つてから、一ケ月ばかり前に隣へ新夫婦が入つて其れが鐵次郎であつたので驚いたこと、鐵次郎は今は岐阜の丸一と云ふ米肥商の手代になつてゐること、あの女は鐵次郎の女房のお島と云つて何處の者で、何うして食付いたかは知らないがモウ籍も入れたさうだと云ふこと、中津のお光の母はお光の家出以來、それを案じて半病人のやうになつたことなどを細々と話して、

『俺アお前さんが可愛さうでならぬから、昨日着いたと云ふ鐵の所在を書いた其の葉書は實は私が出したのじや』

お光の零落した慘ましい姿を見守りながら、善吉は涙聲で斯う言つてソッと袖で眼を撫でた。お光には其れが、何れも之も悲しい新しい事實で、涙の種となるのであつた。お光は殆んど返辭もしないで、泣き續けた。

× × × × × × ×

それから十四年を經ての話である。

鐵次郎は頭瘡と云ふ恐ろしい病氣に罹つた、頭瘡と云ふは一種の吹き出もので、頭から顏へ掛けて癩病と梅毒とを搗き交ぜたやうな恰好になり、痛みが酷うて其の上大抵の者は助らないと云ふのである、鐵次郎も苦しみに苦しんだ、終には生死の境まで行つた。彼は何うかして癒さうと非常に焦り、醫藥は素より神佛の佛心から呪ひ、易凡ゆることを行つたが効果が無い、百計盡きて今度は天理教の所謂神様にお縋りして救ひを求めやうとした。そして或る日天理教の教師から斯んな事を聽いて飛び立つほど驚いた。それはお前の病氣には女の生靈が付いてゐる、然も其れは大分昔の出來事に依る恨みなのだと云ふのである。女の生靈！

彼は此の時直覺的はハ、アお光だなと思ひ浮べた。

『あゝ無理も無い、俺が惡いんだ』

と心の中で合點した彼は、十四年前お光を振捨てた自分の無非道が悔ゐられた。尤も今日までゞもお島の邪慳で而して嫉妬深いのを持て餘してゐる彼は、折々貞淑で柔順であつた先の女房のお光を戀しく思つた、そんな時には決つたやうにお光を見捨た自分の罪の恐ろしさに身震ひする

のであつた。お光が他に縁づいて子を産んだ時、彼が初着を贈つてお光の親戚から屆けて貰つたなども良心の苛責に堪へない處から幾分罪滅しをする意味で遣つたのであつた。

× × × × × × ×

お光の祟りと知つた彼は、直に人をお光の縁嫁先へ派して、内密に詫ひを入れた。お光は最初は、

『今頃そんな話は』

とてんで相手にしなかつたが、それでも終ひには使ひの者の熱誠に動かされて、

『別に大して恨んだ事は無いが、東京から歸つて間もない頃、あの人を

呪ふ意味で郷里の氏神の森の大杉に五寸釘を打つた事がある』

と語つた、

『うむ、其れだ〳〵』

使ひの者は非常に喜んだ。而して其の足で直に東濃中津へ赴き、もう日も暮れてゐたので神主に提灯を借りて大杉の幹を懇に檢めた。すると果せる哉、大人の首の邊りの處に一本の釘が赤錆になつて刺されてあつたので、使の者は其れを拔き取つて、そして翌日岐阜へ歸つて、鐵次郎に其の事を話した。

× × × × × × ×

すると其の日から鐵次郎の病氣は日一日と快方に向つて、二十一日目

には、流石の二目と見られなかつた顏が、元の通りの美しい白い落着いた艶を見せて來た。

鐵次郎は之に依つて罪と云ふものの恐しさを知り、遂に商賣を廢めて身を天理教界に入れた。而して今でも彼は心の清い傳導教師として信者の尊敬を受けつゝ名古屋の幡下に住んでゐる。（をはり）

忠七の位牌

◈あれッ幽靈が！

——幼い秋ちやんは炬燵から飛び出した。神前へ忠七の姿が現はれた——

鯉江行者の末子に秋ちやんと云ふ今年十七になる娘があつて、今愛知縣の女子師範學校に在學中である、之は其の秋ちやんの六歳の時の話である。——

或る日行者が、其の秋ちやんを連れて、親籍先である伊勢町の服部太七と云ふ足袋屋へ行つた。歸宅して寢に就くと十一時頃、今まで炬燵にすや〳〵と寢てゐた秋ちやんが、

『あれいッ幽靈が來た〳〵』

と叫んで飛び起き、狂氣のやうになつてお母さんにしがみ付き、恐ろしさに身を震はせてゐた。家内中驚いて、

『秋ちやん何うした〳〵』

と騷ぎ立てたが、結局何かに脅えたのであらうと云ふ事になつて再び床に就いた。而して其の夜は何事も無かつた。處が秋ちやんは其の夜から病氣になつた。鈴江と云ふ醫師は其れを胃膚であると診斷し、胃腸の藥を盛つたが少しも効果は無かつた。末子の可愛さは格別である、親達は非常に心配して今度は漢法醫として有名な加藤と云ふ人に診せた、其の結果は心臟病であるとの事であつた。が、之も幾ら藥を飲ませても癒らない、不思議である。茲に於てか行者は、お手のものゝ祈禱に掛つた。

時は夜の十一時過ぎであつた。すると神前へ一人の老爺の姿がぼんやりと現はれた。

『おゝ、お前は忠七！』

行者は輛と祈禱を止めて斯う叫んだ。其の刹那に忠七の姿は消えた。けれども行者は例の感應に依つて、秋ちやんの病氣が忠七の祟であることと並に忠七が何んの爲に祟るかを知つた。忠七は伊勢町の足袋商服部太七の亡伯父である。

◆位牌を背負せて

――おくまは孤獨と恨めしさとに泣いた
忠八の孫の不具は邪慳の報ひ――

東濃明智町に服部忠七と云ふ下駄屋があつた、相當の次産はあるが、女房のお園との間に子が無いのを常に心細く思つてゐた。處が其の中忠七は何かの病氣に罹つて死に、お園は郷里の岩村町へ戻る事となつた。が、忠七の弟の忠八を始め親族は何れも無慈悲な手合ひばかりであつたので、先祖や忠七の位牌の外は何一つ與へないでお園を追ひ出してしまつて。お園もお園の身内の人達も其の非道な仕打を憎み、一時は呆然としたが、併しお園の實家は別に食ふに困るほどでも無かつたので、其の儘泣寢入になつてしまつた。掛人として孤獨な生活を送るお園には時々沒くなつた亭主の事が思ひ出されて戀しかつた、而して初めの年の盆には忠七や忠七の先祖の位牌を出して水茶位を供へたりした、が。家の者が其れを見て、

『あんな義理人情を知らぬ奴等の先祖に何んで水など供へる馬鹿があらう、早うソンナものは片付けさつせいッ』

と叱り飛ばしたので、早速もとの絡籠へ仕舞ひ込み、二年目からは氣兼して、もう祭ることはしなかつた。死んだ亭主の事を思ひ出すと、お園は何時も、

『あゝ家の無いと云ふのは全く辛いものじや』

と獨語を言ふのであつた。

× × × × × ×

其の間に年は段々と重なつて邪慳な忠八も、淋しく暮してゐたお園も死に、忠八の忰の太七は名古屋へ出て伊勢町で足袋屋を開いた、お園を

裸で、位牌だけ脊負はせて放り出した忠八の邪慳は、一事が萬事、凡ゆるもの事に用ひられてゐた。忠八の孫達――太七の甥や姪に――盲目や啞や指の少ない不具者の多いのも忠八の邪慳に對する報ひであらうと世間では噂してゐた。

今から十二三年前、足袋屋の太七は痔を疾んだ。いろ〳〵と手當を加へたが何うしても癒らない。すると或夜、死んだ伯父の忠七が痩れ切つた不氣味な姿を枕元へ現はして、

『太七！俺は今瞑土で迷つて居る、供養して呉れ〳〵、俺は浮べぬ』

と言つて太七を搖り起した。ハッと思つて眼を開くとソレは一沫の夢であつた。が、此の時太七の全身の毛は一時、逆立つのを覺えた、而して

體は汗でビッショリ濡れてゐた。氣味の惡さに魂まで震え上がらせた太七は翌日は早速僧侶を迎えて供養をした。

◆迷へる忠七の魂

――兩家の供養で秋ちやんは癒つた
太七に佛心が起きてから彼の家は榮えた――

太七の痔は非常に業の深いもので、永い間苦しみに苦しんだが、それでも其の中に漸く全快した。けれども佛の忠七の靈は浮ばなかつた。と云ふのは太七の行つた供養が只だ一片のものであつたのと、無慈悲な忠八の血を受けて來てゐる太七の事であるから其の一片の供養も心からしたのでなくて、云はば恐ろしさの餘り坊主への布施もお客しみ〳〵で

遣つたに過ぎぬからである。餓鬼道に落ちの忠七の魂は斯うして太七の家に迷つてゐる、其處へ行者が行つたので、溺れんとする者は藁にも縋るとやらで、之も緣者の端、エ、取り付いて遣れと云ふやうな事で、可愛さうに、何の罪科も無い秋ちやんに縋つたものであらう。

と云ふ事が判つたので、鯉江方では其れから毎日々々忠七の爲に供養をした。それと共に此の事を太七の方へも知らした。曩に忠七の幽靈を見て震え上つた記憶の未だ去らない太七は此の話を聞いて又も顏色を變へて戰慄した。而して

『佛の祟りは斯くも摯擁で且つ恐ろしいものであるか』

と云ふことを此の時漸く悟つた。斯うなるともう慾も得もあつたものでない、太七は翌日又も早速坊さんを連れて來て、今度は心から供養をして佛に詫びるやうになつた。兩家の供養で、久しい年月迷つてゐた忠七も遂に成佛したものと見え、秋ちやんの病氣も十日ばかりで忘れたやうに快癒し、其の後兩家共に決して祟るやうな事は無かつた。のみならず太七の店から賣出した運動足袋が、非常なる大當りを見せて、彼の家はトン〳〵拍子に榮え出し、今では足袋成金として仲間の商人から羨まれるやうになつた。

それ以來太七の家の佛壇には毎夜湯茶や燈明が、怠りなく供へられるやうになつた。（をはり）

遺言と女教師

◆俄に起る腹痛

——邪慳な母に叱られて
繼子の政子は『御免よ〳〵』と泣いた——

金司は夜明頃から何うも腹がへンだと云ふてゐた。が、ソンナに大した事でも無し、それに出勤の時間も近寄つたので、平常の通り黒の詰襟服を來て、學校へ出掛けやうと、本箱の上に掛けてある茶色の中折帽を手に取つた。すると其の刹那に俄に腹が痛み出した。

『あ痛たゝゝ』

彼は帽子を攫んだまゝ机の前へどつかと座つて顔を顰めた。

房江は玄關で夫の靴を磨きながら、政子が側から片言交りで何か頻りと話しかけるのを煩さそうにしてゐた。

『父ちやん腹が痛いつてね、母ちやん、癒るの、ね母ちやん』

と政子が聞くと今度は、

『煩いッ』

と叱り、ブラシの手を一寸止めて、

『默つてらつしやいよ、子供の癖に、政ちやんはお喋だねい、餘つ程馬鹿だわ』

と尖つた聲で、政子を瞰むやうにして斯う罵つた。母の權幕に政子はハッと驚いて默つてしまつた、が今度は一寸甘えた聲で、

『御免なさいよ母ちやん、ね、母ちやん御免よ』

と母の顔を覗くやうにして恐る〳〵詫びた。政子の小さい眼にはもう涙が一ぱい泌んでゐた。それは父ちやんの出て行つた跡の母の仕打に對する恐怖の豫感が、胸を衝くからの事であつた。

凝然と腹を押えて机の前に座つてゐた金司は、玄關の二人の會話を、何んと云ふ淺間しい事であらうと思つて聽いてゐたが、政子の詫び聲を聞いてはもう堪へられなくなつて、

『房江、何んでソンナに叱るんだ、お前は何んと云ふ邪慳な女だらう、如何に自分の腹を痛めぬ兒だからと云つて、えゝッ、お前もモトは苟も教育者じやないか……』

腹立たしさに堪えないのでぬつと立ち上つて玄關の方へ行かうとする俄に腹痛が恐ろしい勢て起つて來た。

『お痛、むゝ痛い、痛たゝゝゝゝあッむーん』

机から二足三足歩いたゞけでばたりと打ち倒れ、拳を震はせて悶き苦しみ出した。一口の返辭もしないで默つてゐた房江は、夫の俄に苦しみ出したのに喫驚して座敷へ駈け込んで來た。

『父ちやん何うしたの』

政子も驚いて母に續いて走り込んだ。

『ね貴郎何うしたの〳〵』

『父さん痛いの〳〵』

房江と政子は押へるやうにして金司の體に縋つて、けたゝましい聲を上げて叫んだ、金司は齒を食ひ縛つて只だ。

『うむ！む、うんむ』

と唸つてゐる。その度毎にチョッキの下の下腹がうねり〳〵と波打つて熱が俄に出て來た。

房江と政子の慌て狼狽いて泣き叫ぶ聲に隣家の人々も飛んで來る、醫者が來る、金司の家は上を下への騒ぎとなつた。

◈今から四年前

——無中で數へる四本の指
　　冥人の先の連れ合ひでしやう——

金司の苦しみは——間歇的ではあるが、其の夜から愈々酷くなつた。而して發作中は無我無中になつて悶きながら囈語までも言ふやうになり熱も三十九度から四十五度分位の間を上下してゐた。醫者の診斷は俗に云ふ癪のやうなものであるが、注射をしても感じが無いことが何うしても解せぬと云ふのであつた。

例の行者の所謂鯉江さんが、求めに應じて南武平町の金司の家を訪れたのは、發病後七日目の大正七年六月二十三日の夕方であつた。

行者の行つた時は、恰度其の苦しみが始つたばかりの處であつた。天井の低い六疊の座敷、机の上には子供の綴り方練習帳が山のやうに積んである。床の軸も子供の成績品を表裝したものらしい。本箱には「低能兒教育法」だの「運動場の監理」だのと云つたやうな鹿爪らしい書物ばかりが入れてあるなど、小學校の先生の宅と云ふことは行者にも直ぐ頷づかれた。金司が悶え苦しむ毎に黄縞の蒲團が縱になつたり横になつたり波打つやうになつたりして如何にも苦しさの堪え切れ無いことが察せら

れた。苦しむ病人を押えたり蒲團を直したり、房江はまご〳〵しく立働いてゐた。

『父ちやん〳〵此處が痛いの此處、此處』

おど〳〵して泣き聲を立てる小さい政子の看護もいぢらしいものであつた。

『うむッ』

と一聲高く唸づた金司は、何物にかしどく脅えたやうに身體を振はしたかと思ふと今度は目を据えて狂人のやうに何やら判らぬことを喋り出した。さうして頻りと指を繰る――親指から一本、二本、三本。と順に指を折つて四本目を曲げると、又ぱッと掌を開いて更に始めから數へ直す――それを何度も繰り返すのであつた。先刻から只だ無言で、じつゝ

と樣子を見てゐた行者は、此の時漸く口を利き、

『病因は大抵判りました、此の家に今から四年前に死くなつたお方がありますか』

と聞いた。

『四年前！』

はッと飛び立つやうに驚いて斯う叫んだ房江は、俄に態と落着いた樣子に返りながら、

『四年前と仰しやると、え――と、え、有ります〳〵其れは宅の先の連合ひが、恰度今から四年前に沒くなつて居られるさうです』

と何か憶するやうな態を作つて優しい聲で房江は答えた。

『はゝあ能く判りました、又アトで伺ひましやう』

斯う言つて、行者は又默つてしまつた。

◆先妻の遺言

――鈴枝の肺病は重つた。房江と君子。鈴枝は金司の手を握つて泣いた――

金司の苦しみは間もなく引いた。それで金司夫婦と行者との間に、四年前に死んだ先妻に就いての詮議が始まつた。

『犯したる罪あらば悔いよ、然らば救はれん』

と說く行者の敎を聽いては、金司も四年前の出來ごとを明らさまに語らずにはゐられなかつた。房江も最初は其れを語るのを欲しなかつたやうであるが、金司が話の進むに從つて眼に涙さへ浮べ、心の底から懺悔するのを見ては、良心の苛責と薄氣味の惡いのとに堪へ切れなくなつて、終にはチヨイ〳〵横から口を出して夫の物語に裏書をするのであつた。

物語の要點は斯うである。――

× × × × × × ×

片岡金司が郡部から今の○○高等小學校へ轉任して來てから一年ばかり經つと妻の鈴枝は病氣に罹つた。最初は田舍の暢氣な生活から都會の生活に移つたので、平素餘り丈夫でない彼の女は、心の勞れを覺えたのであらうと云ふ位に思つてゐた。處が病勢は日を經るに從つて愈々重くなり、醫師は遂に肺結核であると診斷した。たつた一人の子供で、夢の間も忘れ得ない可愛い政子にもモウ乳を飲ます事ができないやうになつ

た。それ以來鈴枝は世の中を悲觀して、凡ゆる物事に愚痴つぽくなつてゐた。只だ政子が側に居る時だけは、痩せこけた細い手を延べて政子をあやしなどして、幾分病氣のことも世の中の事も忘れてゐると云ふ風であつた。看病役と子守役とを兼ねた婆あさんを金司は雇入れたが、それでも何かと兎角不自由なので、鈴枝の妹の君子や今の妻の房江に時々來て貰ふ事としてゐた。房江は女子師範時代鈴枝と同級生で、鈴枝が在職中は勿論片岡へ嫁いでからも、互に往來して姉妹のやうに仲よくしてゐた。殊に鈴枝が寢込んでからは、房江は繁々見舞に來ては親切に色々と世話をして呉れたのであつた。

病勢が愈々重態となつて、醫師が、もう長くは持つまいと宣告してからの或る夜の事であつた。鈴枝は夫の金司を枕邊へ呼んで、

『私はモウ死にます、政子が可愛さうでなりません、あなたと別れるのも辛いのですが、もう助からうとは思はれません、私が死んだ後に、私の唯一つのお願ひがあります、それは私の代りに何うか、私の妹を貴郎は貰つて呉れませんか、さうすれば政子は何んなに助かるか知れません、私も何んなに安心して死ぬか知れません、ね、あなたお願ひです……』

痩せ切つた青白い手で、金司の手を確と握つて、繰返し〳〵頼んだ。而して妹にも其の事は頼んであると云ふ事や妹は容貌は善くは無いが、心立ての美しい事は同胞の中でも第一であると云ふやうな事を細々と說いた。鈴枝の兩頰には熱い涙が流れてゐた。

『何を下らぬ事を言ふんだね、お前の病氣はきつと癒る、心配するな、

若し萬々一お前が死ぬやうな事があつたら、そりや君子さんを貰ふがまま、そんな心配をしないで、心を落着けなきや駄目だよ』

金司は慘ましい妻の窶れ方を憐みながら鈴枝の手を確と握り返しつゝ斯う云つて宥めた。

『承知して下さつたの、あゝ嬉しい、もう私は何時死んでも宜いの、でもね、もう政子が見られなくなるかと思ふと私……』

とまで言つて、彼の女は聲を立てゝ泣き出した。

それから三日目に鈴枝は遂に死んだ。

◆良心は目覺めた

——容貌を條件とする結婚の危險な事を金司は悔ゐた——

『お前が萬々一死んだら君子を貰ふ』

と金司の言つたのは、ほんの病人を安心させ慰める意味で、又方便としてゞあつて決して心からの誓ひでは無かつたのだ。と云ふのは君子が、之も師範出で今現に或學校に奉職してゐて、頭も良し、氣質も宜いことは鈴枝の曰つた通りであるが、體格が良過ぎて、その容貌が、鈴枝とは同じ血を分けた姉妹でありながら、似ても付かぬほど醜いからであつただから同じく家のことを世話して貰ふにしても金司には妻の妹で政子の

叔母に當る君子よりも、赤の他人ではあるが、愛嬌があつて肉感的な美しい房江の方が嬉しかつた。鈴枝の死後は隔日位に來る房江が待ち遠しいやうに思はれる程であつた。從つて君子は、母から政子を見舞つて遣れと命ぜられても、

『伊藤先生にばかりチヤホヤ言つて、何んだか義兄さんは私にはそよそよするから、忌やだ』

など、拗て、餘り金司の宅へは近付かないやうになつた。伊藤先生と房江の事である。金司と房江とは同じ××高等小學校に教鞭を取つてゐるのと、斯うした家族の關係もあるので、鈴枝の生きてゐる時から非常に懇意であつたが、それが近頃は一層密接になつて來た。他の先生が歸つてしまつた後でも此の二人が日暮頃までテニスを遣つてゐるのを事を生徒が見受ける事も折々あつた。

× × × × × × ×

金司が茲まで話して來て、

『片岡先生は伊藤先生と、怪しいぞ〳〵』

『なんて生徒が言ひ出したのも此の頃です』

と言ふと、

『あら、ソンナ事までのお話しなさらなくても宜いでしやう』

と房江はさつと耳の邊まで赧らめて抗辯した。

『まあ〳〵』

行者は夫婦を靜めて更に續きを聞いた。金司は其れから約半年經つて

結婚した事、日を追ふて房江が政子に辛く當り出した事などを具に物語つた。房江は不興の表情をしながら默つて其れを聽いてゐた。

先刻から金司夫婦の語る處を悉く聽て終つた行者は、此の時形を改めて、

『や、病源は判りました、それです。人の靈魂は不滅である、御主人が先の奥さんの遺言を無視して今の奥さんと結婚された、その上小さなお嬢さんを今の奥さんが苦しめる、茲に何うして先の奥さんの悲しみと恨と、靈の發動が無くて叶ひましやう……』

懇々と靈肉の關係や人の道を說き出した。

『容貌のみを條件とする結婚の如何に危險であるかと云ふ事を今漸く悟りました。殊に政子の苛められるのを見る時、私は實に斷腸の思ひをします、それが私は敎育者であるだけに一層深刻に感ずるのです。あゝ君子を貰つて置けば宜かつたと此頃中は何時もソウ思ひます』

目覺めたる金司の良心は、行者の前に、臆する處なく斯う言つて告白した。一週間日に數回の堪へ切れぬ苦しみに囲み切つた彼の眼からは涙がはら〳〵と落ちてゐた。良心に責められての事であらう、側にゐる房江は此時わッと聲を立て疊に仰伏して泣き出した。

× × × ×

房江にも金司に對する不滿があつたので離緣の話は纏り、房江は郷里へ歸る事となつた。二人の間には光風齊月の境が開かれた。そこで行者の勸めに從ひ三七二十一日の間鈴枝の爲に供養をすると注射さへ利かない程のさしもの腹痛も遂に拭つたやうに癒つたのであつた。（をはり）

次の一篇は、私が名古屋新聞にゐる頃、同紙上――大正五年一月十四日より四日間に亙り――に掲げたもので、私が鯉江行者を知るに至つたのは之が爲めである。

鯉江行者

常狸

◆親子五人の狸憑

――女房から始まつて家内中の間を憑き廻る古狸――

狸つき、狐つき、天狗つきなど云ふ事が世俗には稱へられるが併し其の實物を見た人は稀であらう、又其麼事は誰しも眉唾物として眞に受ける者はあるまい、記者の如きも亦其麼事は絶對にあり得べきで無いと思ふてゐた。處が大正の今日而も市内人口稠密の中區日の出町に「狸つき」が現はれて、記者も亦其れを實見したと云ふのであるから不思議では無いか。

所は日の出町五丁目六十二番地に高和屋と云ふ富屋がある。主人は通稱但馬虎吉本名、高橋太郎吉(四六)と云ひ家内をはなゑ(三五)と呼び、其仲に蔀(六っ)すゞゑ(四っ)しめ子(三っ)の三子がある。ところが何うした事やら女房のはなゑは昨年十月の十八日から變な手付をしてトテッも無い事を喋り出した。サア大變近所の者や親戚は毎日のやうに集つて兎や角と評定を始めた處が、例の世俗に傳はる、狸つきと決定した。と云ふのは女房が其發作に入ると『俺は某山に住む狸で、八百年の齡を重ね重ねた者であるが、某の依頼に依つて此家の主人を殺しに來たんだ』などゝ云ふからである。然るに其の後に至つて狸は女房を離れて主人へ移り再び女房へ歸ると云ふように夫婦の間を轉々して居る。かうして之が憑けば亭主も女房も同じ擧動をする。其發作は交代に晝夜に亘つて數回行はれ

ると云ふ有樣、甚だ以て氣味の惡るい次第である。で或時狸が家内に移てゐる時、主人は唐辛を一升許り買て來て之を火鉢で燃しつゝ女房に跨がした、之は辛ひ煙を以て燻して遺れば退くと云ふことを主人が何處で聞いて來ての仕事である。處が果せる哉狸は退いて平常に復したが、其仕り今度は狸が子供に轉じた。

今度は、子供の間を轉々する、僅二つになる未子のしめ子迄が狸がつくと寢床から飛上ると云ふ奇現象を呈するに至つた。斯うなると子を思はぬ親は無い、女房は、

『ヤレ奇愛さうにモウ唐辛は廢めるから子供は助けて私に來て呉れ』

と頼む。すると狸は又復女房へ復歸する。斯う云ふ樣にして狸は一家五人悉くの間を轉々してゐた。家内全部狸憑！何うして之が大評判にな

らずにゐられやう。此有樣を持續しつゝ大正四年は過ぎた。併し新春も依然として變らない。

◆オイ常次郎出ろ

――警察は營業停止を命じやう
狸憑の奇妙なる擧動――

とした。

發病以來親戚は色々と手を盡してゐたが一寸も癒らない、其中に東陽町五丁目營養學會なる者を開いてゐる鯉江と云ふ人が心靈の研究をして居ると云ふので、此人に治療方を依賴する事とした、處が依賴して間も無く警官が見て二時間にも亘つて其奇擧動を見て行つたと云ふのであるから問題は愈々急を告げて來た。と云ふのは警官が當然之は精神病者で

あると決定すれは、營業停止を命ぜられる事は極まり切つてゐるからである。だから親戚は鯉江行者にせついて警官の來た正月六日の其の晩之を癒して貰ふ事とした。其處で記者は社員の半眠生と共に此高和屋へ出張して其奇現象と行者の治療する處とを見せて貰ふ事になつた。茲に斷つて置くのは記者は狸つきなるものを始めから眞に受けてゐないのと行者とは未知の間柄である點である。記者は非常な、興味を以つて高和屋へ行つた。時は午後の九時過ぎであつた。商品陳列館の少し南から西へ入つて大光院を通り拔け狹い道を二度ばかり曲つた左側の家である。二階に通されて薄暗いやうな瓦斯の光を浴びて待つてゐると親戚の人やら記者やらで五人になつた。其中に、

『今晩はドナタ樣もお寒いのに御苦勞樣で御座います』

と細君が茶や菓子を運んだ、何うしてチッとも狸のついたやうな處は無い。

主人も子供も同樣である。發作を起さない時は常に彼等は斯う云ふやうに眞人間であるさうな。暫くしてから親戚の某君、時分は宜しと、

『オイ常次郎（狸が俺は常次郎と云ふ狸だと常に自稱してゐるさうで）一寸出て出ぬか』

と呼び出しを掛けると摩呵不思儀！女房は見る〳〵うちに身を顫はせ始めフー〳〵と息を荒くする、眠を閉ぢ手を合せる。

さうして其合せた手を圓形に縱に廻して恰も月に對して居る繪で見る狸のやうな恰好をしながら、呼出した人の問に對して、

『ふーじーみー町ーの某（匿す）に賴ーまーれて此の家の主人を殺しに來

た』

と稍低聲の力の入つた聲で喋べり出す。主人は側に氣味惡さうに、

『ナニ畜生！拔しやがるナ』

とばかり睨みつけて居る。其れが始めてドいろんな質問が發せられ、其れに一々答へる。物凄いやら、可笑しいやら、氣の毒なやら、記者等は此不思議な光景を瞬もせずじつと見てゐた。さうして其模樣は催眠術に掛つた人と施術者との問答と能く似て居る。

◆行者と狸との問答

——俺は人に賴まれて此家の亭主を殺しに來た——

此奇妙なる現象を見せらるゝ事約一時間半、記者は始めて目の當り狸つきを見た、不思議でならぬ。何だか自分もモウ狸に誑らかされて居るんぢや無いかと云ふやうな心地にもなつた。斯うして居る處へ行者は來た。さうしてジット細君の喋ることや素振を見てゐたが、徐に口を開いて扨て說き出した。

『他人に賴まれて憑き得る程の神通力を持つてゐるなれば、何故其れを善い方面即ち人を助ける方へ使はないか』

之をきつかけに大に說法した揚句。

『汝立處に退散すれば汝の望みを得てとらすべし、若し退散せざれば其處一寸も動けざるやうにするのみならず遠く地獄の底へ落して遣はすべし如何』

てな事でキメ付ける。すると狸の細君、大に其威權に恐れ面喰つた體で、

『一寸待つて一下さーい』

とばかり俄に烈しく手を廻はし始める。

『返答如何』

『一寸待つて』

を幾度も繰り返した末、

『祀つて呉れゝば退く』

と返辭した。

此時行者は、

『諾』

と一言叫んだかと思ふと俄に何やら經文を聲高々と唱へ始め、最後に、

『ヤッー』

と一聲氣合を吳れて右手を斜に振り下すと、あゝら不思議や、今まで狂態にあつたさしもの細君もピッシリ元の細君に歸つて呆然として居る。其れから行者や親戚の人やらが何處に祀らう、何に納めやうなどゝ話してゐると細君は、

『アレが宜いぢやありませんか』

と階下から一個のお社塔を持つて來る、モウ少しも、異つた處は無い、

『常次郎大明神』

と行者が書いた紙を其のお社塔の中に納め、行者やら親戚の人やら數名で、手を清め、拍手を打つて普通の祭神するやうに、

『高天が原には……』

と祭文を上げた。之で全く段落は付いたと云ふので記者等は歸路に就いた。行者は其神を奉じて東山とかへ行くと云ふて出掛けた。時は午後の十一時過ぎ、

『何方樣も誠に恐れ入りました』

と戸口へ送り出す主人夫婦は、最早眞人間、何の變つた氣配も無い。

翌朝に至り細君は再び發作を起し行者を呼びに來たさうで、同行者は直ちに出張すると同時に愛知病院より北川醫士を招いて診斷せしめた。處が同氏は內科的に何等異狀無きを言明して引取つたので、玆に於て行者は前夜同樣の手段に依り直に心靈的治療を行つたきうな。診察せしめたのは、由其斯ういふ者は憑者が去ると同時に死ぬ事があるからださう